
黒影十字軍 - 殺人幕 -

五塔麻弓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒影十字軍 - 殺人幕 -

【Nコード】

N1717C

【作者名】

五塔麻弓

【あらすじ】

去年の12月、石川県での活動を拠点にする『黒影十字軍』は孤島にある劇場、黒船に稽古に来ていた。そこで起こった女劇団員の謎の自殺。『黒影十字軍』は一時解散したが、二ヵ月後の二月『黒影十字軍』は復活演目をするために、再度黒船を訪れる。そこで起こった奇妙な連続殺人事件。二重密室の真相は？犯人は誰なのか？そして自殺の真意は？皆様、どうぞ期待

プロローグ（前書き）

本格推理小説です。

犯人当てを目標にしています。

是非、謎解きに挑戦してみてください。

プロローグ

黒影十字軍

―殺人幕―

著者 五塔麻弓

登場人物紹介

国貞健吾……………劇団「黒影十字軍」二代目劇団長 キング、ジョーカー役（32）

由理かもめ……………「黒影十字軍」男優 本名木本泰平 スペード役（27）

紅井武丸……………同 本名木村勇樹 クローバー役（24）

水野麻莉亜……………同女優 本名神崎ユイ 現役無し（24）

夢見カレン……同 本名塚原霧子 ダイア役（25）
牧野康明……脚本家「私」（30）
佐藤勇次……新入りのバイト君（18）
山本一郎……劇場「黒船」の管理人（71）
姫嶋美代子……劇場「黒船」で謎の自殺をした元ハート役（故人）
石川紗希……喫茶店「K」の店員（23）

プロローグ

2006年12月31日

* * *

それは本当に一瞬の出来事だった。彼女は舞台へ上がり、二階に続く階段を素早く駆け上がった。そして二階の窓に身を乗り出した。彼女は目に涙を浮かべていた。何故こんな事になってしまったのか、まったく分からなかった。

「何故なの……なぜ？ 私はただ真面目に頑張ってきただけじゃない……なのに」

彼女は自分の自慢の衣装に手を触れた……衣装はビリビリに引き裂かれ、切れた衣装からは白い肌が露出していた。

後ろの扉の奥からは、彼女を呼ぶ複数の人間の声が聞こえた。

しかしそんな声は彼女には届かなかった。

彼女は窓に座り、空を見た。すでに太陽が昇ろうとしていたが、風は冷たく彼女に吹き付ける。

そして彼女は頭から地面に身を投げた。

* * *

2007年1月27日

私は部屋の真ん中に座っていた。この一ヶ月の間、一日たりとも自由に休めたことは無かった。

私は、ある劇団の脚本家をやらせてもらっている。一ヶ月……去年の十二月の話だ。2007年を翌日に控えた『十二月三十一日』

に劇団員の一人が謎の自殺をした。

不可解で理由も分からないまま、警察は単なる事故と判断したが、マスコミは黙っていないかった。毎日のように来る取材陣、雨のように掛かってくる電話。とてもじゃないが、体を休めることなど出来なかった。

しかし一ヶ月もすれば、そのような輩も日に日に減っていき、ついには来なくなった。

私はただ部屋に座っていた。疲れを通り越し、無気力になっていた。

そんな私に一本の電話が掛かってきた。

プルルルル……何日ぶりかの電話に、私はビクツとした。またマスコミからの電話かと思ったからだ。しばらく無視をしていたが、コールが止まらないので私は仕方なく出た。

「はい牧野ですが」

「康明か！……久しぶりだな、僕だ」

聞き覚えのある声に思えた。

「国貞だよ」

電話の主は私が脚本家をしている劇団の団長、国貞健吾によるものだった。彼とは長年の付き合いがあり、プライベートでも親交があったので、この時の電話はとても嬉しかった。

「国貞か。確かに久しぶりだ、あの事件以来だもんな」

私が真っ先に一ヶ月前の事を言ったので、国貞はたじろいだ。

「あ、ああ、そうだな。君はこの一ヶ月何にも無かったのかい？」

「そんな事は無い、正直一ヶ月間大変だった。マスコミへの対応にね」

「君にもか、僕のほうも大変だったよ、団長としての責任がどうかで……」

国貞は真面目に言っているようだったが、話を逸らそうとしている事に私はすぐに気が付いた。

「私の方から電話する事はあっても、国貞から電話してくる事なん

て滅多に無い。何か大事な話があるんだね」

私は国貞とプライベートで会うときも、私から電話をかけている。国貞から電話を貰った事は恋愛相談の時ぐらいだ。

「ああ、やっぱり気が付いた？ 電話をかけるのは苦手だね」

「で、私に何のようだ？」

「ああ、実は今回……また劇団を復活させようと思ってね」

「はあ？ 国貞、自分が何を言ってるか分かっているのか？」

私は国貞が言っている事が信じられなかった。たった一ヶ月前に自分の劇団で死者が出たというのに、この男はまだ舞台をやりたいというのか……

「僕は真面目さ、だから脚本家である君に、真っ先に電話したのさ」

「そんな……私は反対だ、そんな事」

正直、これ以上変な事には関わりなくなかった。心が折れていた。しかし、国貞は

「いいかい？ これは君にも良い話なんだよ？」

と言った。私は国貞が言わんとする事を分かりながら

「……どういう意味だ？ 私になんのメリットがあるというのだ」と言った。

「じゃあ聞くが、君はこれからどうやって食っていくんだい？」

やっぱりそこを突いてきたか。

「そ、そんなのはバイトしてでも……」

「なんの資格や免許を持ってない、三十の男がか？」

「ぐ……」

確かに普通の会社なら、こんな奴より若い学生を採用するだろう。

「良いかい？ もう一回言う、これは君にも良い話だ……もう一度考えてみてくれ」

国貞はトーンを崩さずに、再度言った。

「ちよつと待ってくれ。いくら私と国貞が大丈夫だからって、他の劇団員はどうなんだ？」

「じゃあ君はもう決定なんだね？」

「仮に私が良いとしてもだ」

私は熱くなっている自分に気がつき、声を和らげた。

「それでもいいさ、君はとりあえず、そこにいて僕の電話を待っていてくれ。他の劇団員に連絡してみるから」

「はあ……」

「いいかい？」

「分かった。じゃあ、切るよ」

「あつ、待つて」

受話器を置こうとした私を国貞が呼び止めた、そして

「電話のジャックは抜くなよ」

と言った。

「そんな事分かってるよ！」

私は受話器を荒々しく置いた。

「劇団の復活か……」

私は静まりかえった部屋の中で一人呟いた。こうしてみると先ほどの国貞との会話が、夢だったようにも思えてくる。

劇団をもう一回やるなんて、考えても無かった。いや、考えてはいたが心の中でそんな事を考えてはいけなさと、思っていたのかもしれない。

国貞が言った事は確かだ。私には今、生きていく当てがない。一ヶ月間仕事も無く、貯金を下ろして生活するという事をしていた。しかし本当に復活などして良いのだろうか？ 人が一人、それも身近な人間が一人死んだんだ。それも自殺。自殺の理由は分かっていないが、少なくとも私は自殺の原因になる事（自分では思う……）はしていない。

ただ自殺の場所があそこだったのだから、きっと自殺の原因は劇団内にある。

「はあ……」

胸の中が重くなり、ため息が出た。

腕時計を見ると、午後二時を指していた。まだ日は落ちていない。国貞からの電話はいつになるだろうか。私はまったく眠気は無いものの、布団を敷いた。布団に横になり、私は一ヶ月前に自殺した劇団員、『姫嶋美代子』の自殺した日の事を思い出していた……

プロローグ（後書き）

ご拝見ありがとうございます。

第一幕 回想―劇団員の自殺―（前書き）

第一幕です。

第一幕 回想―劇団員の自殺―

第一幕 回想 ―劇団員の自殺―

2006年12月31日

辺りが少し明るくなってきた深夜、私は『黒影十字軍』の劇団長、国貞健吾と一緒に談話室で、台本の改正や舞台演出の話し合いをしていた。

国貞は父親から受け継いだ、石川県での活動を中心に行っている劇団『黒影十字軍』の二代目劇団長をしている。

黒影十字軍は他には無い、その独特な舞台で人気を持っている劇団である。まだ知名度は高くないが、石川県以外の県でも公演を行ったりもしている。

私は劇団『黒影十字軍』の脚本家をやらせてもらっている。脚本家といっても劇団員といつもいるわけでは無く、自宅で独自に台本を編集したり稽古場の発注などをしている。

今回は石川県の港から船で、約二十～三十分の位置にある『劇場黒船』を十二月二十八～三十日まで貸切り、劇団員全員で舞台稽古をしに来ていた。

黒船には現在、山本一郎という老人の男が一人住んでいる。こんな立派な劇場を無償で貸してくれるので、とても優しい人だと思う。舞台稽古は二十八、二十九、三十日と無事に過ぎていき、現在夜も明けて三十一日私達は談話室にいた。

地元の石川県に帰るのを本日の朝に控え、私は不意に談話室に掛けられた壁時計に目を逸らした。時計を見ると午前三時半を指していた。

「これは石川に戻ってからじゃなくちゃ休養できないね」私は本音がポロリと出てしまっていた。

私と国貞は絶えず口から出てくる、あくびを噛み殺しながら新アイデアの提案などをしていた。二人は最初は真面目な意見を出し

ていたが時間が経つたびに集中力が無くなっていき、突拍子の無い意見ばかり出てくるようになってきた。

「だからね……私はいつその事、劇をやるのを止めて君の父がやっていたようなコント劇場をやった方がいいと思うんだけどね」

「何を言ってるんだ康明？ だったら僕らの今までの時間はなんだったのさ？ もつとまともな意見はないの？」

「ふわああ。なんかもう頭が働かないんだよね、そういえば気になったんだけど私達が今やっている舞台『トーテンクロイツ』は、誰のアイディアで始まったんだっけ？」

私はシヨボシヨボする目を両手で擦り、国貞に聞いた。すると国貞は飽きた顔で言った。

「ええ？ いち脚本家がそんな事忘れますかね？」

「じゃあ、いち劇団長さんはもちろん覚えていますよね？」

「当たり前じゃないか」

「誰でしたっけ？」

「美代子だよ」

「あ……」

言われてから私は思い出した。『トーテンクロイツ』のアイディアを出したのは美代子だった。

『トーテンクロイツ』とは僕らが今やっている劇である。

内容は、闇の男（以下ジョーカー）が魔法で操った少年（以下スピード）を殺戮人間に変え、スピードは国を支配しようとするためにあらゆる手を使って虐殺を繰り返す。

ジョーカーの洗脳をしない王（以下キング）は少年を抹殺するために、討伐部隊『トーテンクロイツ』を向かわす（メンバーは三人で、以下クローバー、ハート、ダイア）……軍事力をちやくちやくと手に入れたスピードはとても手ごわく、トーテンクロイツは長い戦いを強いられる。

スピードは、トーテンクロイツのメンバー『ハート』に恋をしてしまい、ジョーカーの洗脳は解ける。

この舞台のクライマックスの面白い展開である、ジョーカーの正体。ジョーカーの正体はキングだった。ジョーカーとはキングの作り出した醜い二重人格者だった。

国貞はジョーカーとキングの二役を演じていて、ジョーカーの役の時は後ろ姿で出現し、マントとカツラを装着している。ちなみに私はというと脚本家でありながら、ちゃっかりナレーターとして出させてもらっている。

『トーテックロイツ』を提案した美代子はハート役で、見所が多い。この役を他の女優劇団員も狙っていたようだが、美代子の演技力は目を見張るものがあり、ハート役は美代子に決定した。

私と国貞はその後、談話室から国貞の部屋に場所を移し、話をしていた。……が、もちろん舞台の話をする元気は二人とも無くプライベートの話ばかりしていた。国貞は高校時代に薬学部にいて高校生でありながら、先生達が研究している新薬品の会に参加させてもらえる程の実力者だった。その裏話などを聞かせてもらった。

それから何分ごろ話しただろうか。私は眠気が我慢出来なくなり、国貞に仮眠をする提案をした。国貞も相当眠かったらしく、あっさり了承した。

私が国貞の部屋を出ようとした時、生涯忘れないであろう出来事が起きた。

「もう嫌……もう嫌あー！」

ロビーの方から稲妻のような女の叫び声が聞こえてきた……

私は思わずドアノブに掛けた手を引っ込め、国貞を振り返った。すると国貞が先に話かけてきた。

「康明！ 今の声は？」

「分からない。しかし、ただ事では無い声だったぞ」

「早く行ってみよう！」

そう言つと国貞はドアノブを回し、ドアを開け部屋を出た。私にはあの叫び声为谁のか分からなかったが、心の中がざわめいていた。私は国貞を追いかけた。

廊下を抜けホールに出たとき、劇場の方へ走っていく女の後ろ姿が目に入った。女はハート役の衣装を着ていた。赤と白の色が使われた洒落た衣装である。……ということは……。

「美代子！」

私が答えを出すよりも早く、国貞が声を上げた。

「い……嫌、来ないで！」

美代子はこちらを向き、悲痛な叫び声を上げた。私はその姿にびつくりした。彼女が着ていたハートの衣装はビリビリに引き裂かれ、胸元からは乳房が飛び出していた。彼女の肌は暗闇に光る月のように白かった。

彼女は再び後ろを振り返り、劇場に続くガラス廊下を走りだした。彼女を追いかけようとした時、後ろから声が聞こえた。

「あの……何かあったんですか？」

後ろを振り返ると、スピード役の由理かもめが立っていた。その後ろにはクローバー役の紅井武丸も立っている。由理は七三分けの小柄な男、武丸は長髪で中肉中背。

「こんな時間に劇の練習っすか？」

今度は武丸の方が声をかけてきた。

「馬鹿言っな。こんな夜中、ていうかもう朝だ！ みんなの迷惑になるだけだろ」

私は唾を飛ばしながら、武丸に言った。心の中のざわめきが大きくなっている。彼女を早く追わなければ！

「国貞！ 早く美代子を追っぞ」

私はガラス廊下を見た、美代子は劇場の両開き扉を開け、中に入っていた。私と国貞はガラス廊下を走った。由理と武丸も首をかしげながら後を追った。

ガラス廊下は二十メートルほどの長さで、その中間あたりに外へ出る透明なドアが左右にある。ドアから出た先は円形に白い花が咲いていて、良い匂いがしている。

私達は劇場の扉の前に到着し、ドアを開けようとした。しかし内

側から鍵がかかっていて開ける事が出来なかった。

「美代子、開けてくれ！」

国貞が劇場の中にもきこえるであろう、大きな声で叫んだ……が返事は無い。

後ろから由理と武丸も到着し、武丸が声を出した。

「美代子さん？ 俺っす。武丸です、どうしたんですか？ こんな朝に……開けてくれませんか？」

武丸が言っても扉は開かれなかった。

私は一連の行動を見つつ、考えた。美代子は劇場に閉じこもっている。そしてあれが芝居では無いとしたら……劇場の内部を思い浮かべてみた。答えはあきらかだった。

「外だ！ 彼女があぶない」

私はガラス廊下を戻り、劇場側から見て右側の扉を開いた。外の空気は冷たく、空はすでに白みがかっている。素足で花の上を歩くのは気持ちが悪かった。

「マキさん、何をし……」

由理が後ろから聞こえて来たので、

「早く来るんだ」

と答えた。

劇場の裏側へ出ると、美代子は劇場の二階の窓から体を出していた。

「美代子、何をしているんだ」

私は大きな声を上げた。

しかし美代子は次の瞬間、その華奢な体を宙に浮かせていた。

「あ！」

私達は急いで駆け寄ろうとしたが、間に合う距離じゃなかった。

落下の瞬間、美代子は最後の声を上げた。

「……『トーテックロイツ』は一つ欠けた……」

彼女は頭から地面に衝突した。彼女の夢のように美しい顔を作っていた頭は破裂した。

私達は突然起こった目の前の出来事に対して、お互いに言葉も発することが出来なかった。その日常離れた事に……

空にはもう眩しい太陽が昇り、日光が落ちてきた。

美代子の頭は原形が無いほど醜く潰れており、紅い血が流れていた。その血に光が反射し血が揺らんで見え、とても綺麗に感じた。

私達はずっとその場に立ち尽くし一言も喋れなかったが、やがて武丸が口を開いた。

「な、何なんですか、これは……何の冗談なんですか!」

武丸は言った。どうやら私と国貞に言っているらしい。

私は何も言うことが出来ず、首を横に振っていた。まだ頭の中で整理しきれて無かった。

ただ突っ立っている私をよそに、国貞が武丸に言った。

「僕には、僕には何も分からない……でも彼女は確かに自分の意思で呼び降りたんだ」と言った。

「そんな、そんな事って……」

武丸は顔を青くして呟いた。

「と、とにかく山本さんや皆さんに知、知らせた方がいいんじゃないですか?」

由理が焦りながら、言った。焦っていたので少し嚙んでいた。

私は気持ちいが冷静では無かったので、その考えに至る事さえ出来なかった。

由理がそう言ったので私達は、先ほど出てきたガラス廊下に戻っていた。最後に私がガラス廊下に入り、ドアを閉めた。

その時私は不思議なものを見た。円形に咲いた白い花の上に、ポツポツと赤黒い物が付着していたのだ。一つ一つは小さいが白い花の上に赤い物が付いているのは、不気味だった。

「康明? 何をしてるんだ」

国貞が私に聞いてきた。国貞は気づいてないのだろうか。目の前であんな凄惨な事が起きたのだ、こんな事どうだっていいか。

「ごめん、今行くよ」

国貞は劇団の団長だ。劇団員の死は後に大きな問題になるだろう。そして一番責任が問われるのは団長である国貞なのだ。私は胸が締め付けられる思いでガラス廊下を歩いた。

ホールに戻り、私達はまず山本老人がいる『管理人室』へ行った。四人の足取りはとても重かったが、この事実から目を逸らすことは出来ないのだ。

国貞がドアをノックした。……出てこないで再度ノックした。

山本は今年で73になるいい歳だ、耳が遠いのだろう。三度目のノックでやっと出てきた。

「なんじゃ、こんな朝から。何の用なのじゃ」

山本は上下、鼠色の寝間着を着ている。顎には白いものが混じった、無精ひげが伸びていた。由理が山本に話かけようとしたが、国貞が手で止めた。

「山本さん、今から僕が言うことを落ち着いて聞いてください」
と山本に国貞は言った。

「ああ」

山本は本当に話を聞いているのだろうか？　そう思えるほど返事に心が入っていない。

「私達と一緒に稽古していた女劇団員、姫嶋美代子……覚えていますよね？　彼女が劇場の二階から転落死しました」

国貞は悲しい顔をしながら山本に言った。が、

「はいはい……分かった」

山本の返事は素っ気無かった、私達の話を冗談かと思っているのだろうか？

「ちょ、ちよつと山本さん。私達の話聞いてましたか？」

「聞いたよ、ちよつと見に行ってくるわ」

そう言うと、山本はガラス廊下へゆっくりと歩いていった。

「どういう事なんでしょうね。あのトーンは？」

武丸がそう言った。もう元の調子を取り戻している。ここにいる人は人が一人死んでも、支障は無いのだろうか。私は釈然としないものを感じながら、武丸の言葉に頷いた。

「次はカレンと麻莉亜か……」

ため息をつきながら国貞は言った。

「国貞さん、俺、彼女達とは仲がいいんで俺が行ってきましようか？」

と武丸が言った。

「武丸。そんなおちよろけな感じで言わないでくれ、私も疲れているんだ」

国貞は武丸の顔を見て言った。

「いえ、だから俺が行ってこようと……」

「人の死をそんな軽く見るな！ もういいから、由理と武丸は自室で待機していてくれ」

国貞は赤くなりながら言った。

「は、はい」

由理は振り返り、とぼとぼと自室に帰っていった。彼も疲れていたのだろう。私には由理の気持ちが分かった。武丸も由理を見ると、引き返すそぶりをした。直前に振り返り、

「どうせ団長は責任問題の事しか考えてないんでしょね」

と言い、自室へ戻っていった。

なんていう奴なんだ。私はこの時素直にそう思った。一瞬、美代子のあの凄惨な現場よりも、人の感情の方が怖く感じた。

「国貞、気にするな」

私は国貞を慰めようと、言った。

「いや、武丸の言うとおりかも知れない」

「え？」

「心の端で僕は『石川県に帰った時』の事だけを考えてるかもしれない」

「そんな、君は団長だろ？」

「だからこそさ……」

そう言い国貞は顔を伏せた。

「もついい、分かったよ国貞。でも今は伝えるのが先だろ？」

「つらいな……」

私と国貞は、現在役が無い、女優『水野麻莉亜』の部屋へ向かった。麻莉亜の部屋の前に行くと、誰かと話しているような声が聞こえる。何を話しているかは分からないが、誰か部屋にいるのだろう（黒船には電話線が通ってなく、電話できないからだ）

麻莉亜は長身（170cmほど）で黒髪のロングヘアー、目が大きく特徴的な声（たまに裏返る）をしている。

ドアを私がノックすると、すぐに麻莉亜が部屋から出てきた。

「どうしたんですか？」

麻莉亜は大きな目を動かしながら、聞いてきた。国貞は開いたドアから中を覗いた。中にはダイア役の夢見カレンがいた。

「君らはずっとこの部屋にいたのかい？」

国貞は聞いた。

「はい、そうです。今日は中々寝付けなくて……カレンさんに部屋にきてもらったんです」

そう言っていると、

「団長！」

突然カレンが話しかけてきた。

カレンは麻莉亜とは対照的に背が低く（160cmほどだろうか）髪を朱色に染めており、ソバージュ。爪を噛む癖がある。

「あたし達は寝ないで今まで話していたんだけど、さっき変な叫び声を聞いたような気がするの。あれは気のせいだったのかしら？」

私達が話そうとしている内容だ。やはりあの叫び声はみんな聞いていたのか。

「やっぱり君達も聞いていたのか？」

「ええ、私達は美代子だと思ってただけだ」

カレンは麻莉亜をの方向を向き、国貞に言った。

「ちょっと待って、カレンさん。私はそんな事言っていないです」

「何言ってるのよ麻莉亜、あなただって言っていたじゃない」

「ちょっと待って」

私は二人に質問した

「何であの叫び声が美也子だと思ったんだ？」

「え？」

カレンと麻莉亜は同時に声を上げた。カレンは爪を噛んでいる。

「いや……」

カレンは口ごもったが、麻莉亜が

「それが先ほどの『私』は言っていないという事に繋がるんです」と言った。

「どういう意味？」

私は麻莉亜に言った。

「マキさん、良いですか？ 私とカレンさんは二人で私の部屋にいました。そしてその時に叫び声が聞こえてきました。女の人の叫び声だというのは分かりましたから、すぐに誰かは分かりました。黒船には女劇団員は私とカレンさん、それに美也子さんしかいませんでしたから、あの叫び声は美也子さんだと判断したんです。」

麻莉亜はなるべく伝わるように言った。

「なるほどね。じゃあ『私』は言っていないという事に繋がるっていうのは、どういう意味なのかな？」

「はい、簡単な事です。状況的には美也子さんしかいなかったわけです、私は『あれは美也子さんの声』だったとは言っていないません。きつとそこらへんで勘違いをしてしまったんでしょうね……ふふ」

麻莉亜は微笑みながら言った。横のカレンは爪を噛みながら頷いている。カレンは前に出て来、

「それで、美代子は？」

「ああ。その事なんだが……」

私は横の国貞の方を向いた、国貞は頷き一歩前へ進んだ。

「今、山本さんにも言ってきたんだが、美代子は……」

「うおおおー……」

国貞が言いかけた時、悲鳴が聞こえた。

悲鳴の後、遠くから足音が聞こえて来、後ろに迫ってきた。

「はあはあ、お、お前ら、さっきの事は冗談じゃなかったのか？」

来たのは山本だった。走ってきたのだろう。はあはあ言っている。

「山本さん……」

私は言葉に詰まってしまった。やっぱり冗談だと思っていたのだ。

「ど、どうなっているのじゃ？ あ、あんな、あんな事……」

山本は普段とは想像もつかない程に取り乱している。普段冷静を装っている人ほど、パニックになったら立て直しできないというのが、本当のようだ。

「山本さん、落ち着いてください。今彼女達にも状況を説明している所なんです」

国貞は山本のか細い肩に手を置き、言った。

「い、いかん。あんな物を女が見てはいかん」

「団長？」

カレンが国貞に言った。

「さっきからあたし全然状況が読めないんですけど、どういう事なんですか？」

「美也子は、劇場の二階から転落死した……」

「え？」

カレンと麻莉亜が同時に言った。

「何を言ってるんですか？ ……団長」

麻莉亜が国貞に言った。

「……」

「そんな、嘘ですよ？ 美也子さんが死んだなんて」

麻莉亜は探りをいれるような顔で国貞を見た。

「残念ながら、本当だ」

国貞は顔を伏せ、言った。

「そんな、そんなの嘘です。じゃあ劇団はどうなるんですか？」

「人が一人死んだんだ、前みたいに自由に活動は出来ないだろう」

「嘘、嘘よ。私まだ舞台に出た事だってないんですよ？ 同じ時期に入ったカレンさんだって舞台に出ているのに」

「麻莉亜……」

「団長だって、私の演技をかってくれていたはずじゃあなかったんですか……」

「麻莉亜、そういう事じゃないんだ。君にも分かるだろ？」

「ううう……」

麻莉亜は自分の部屋に入っていた。私には麻莉亜を止めることは出来なかった。

部屋に戻ってしまった麻莉亜を、黙って見ていた私達は廊下にした。麻莉亜の前の廊下には、私、国貞、カレン、山本の四人がいた。

「あの……団長？」

カレンが上目遣いに国貞を見た。

「なんだ？」

「あたし、その、美也子を……見てきたいんですが」

カレンがそう言つと、また山本が

「いかん。あんな物を見たら、いかん」

と横から言つた。

「分かっています山本さん。でもあたし、事態を早く收拾したいので……すみません」

そう言つとカレンはホールに出るドアを開き、出て行つた。

「全然分かつたらんじゃないか」

山本は吐き捨てるように言つた。

その後、私達は由理、武丸の部屋を回り、呼び寄せた。そして五人固まって談話室に入った。談話室には大きなソファが二つにテーブル、暖炉がある。

黒船は石川県の絶海に浮かぶ孤島で、船が無いと帰ることが出来ない。この島には船は無く、朝の七時に迎えに来るようになってい

た。

談話室には重たい空気が流れていたが、相変わらず武丸は普段とさほど変わらない調子で話しかけてくる。

「マキさん、今何時つすか？」

「は？」

私は腕時計を見た、自慢の銀の時計だ。時計は午前六時を示していた。談話室では壁に時計が掛かっていたので、そちらを見たが基本的に私はこの腕時計を見るようにしている。

「六時だ」

「六時つすか、あと一時間つすね」

と武丸は言った。

しばらくすると山本がお茶を持ってきたので、私は軽く会釈をした。

「あ、すみません山本さん。言ってくれたら僕も行つたのに」

国貞は山本に言った。

「いいんじゃないよ、これでも飲んで……」

山本はそう言い、私達にお茶を配ってくれた。

私はお茶に口を寄せた。口の中にいかにも花といったような味が広がった。私はこんな味のお茶を飲んだことが無かったので質問をした。

「山本さん、このお茶は何ていうものなんですか？」

「ああ、これはジャスミン茶だよ」

「ジャスミン？」

「ほら、ガラス廊下の周りに白い花が円形に咲いてたじゃろ？ あれじゃよ」

「ああ、あれですか」

私は思い出させずにはいられなかった。あの白い花についた『赤いもの』……あれは何だったのだろうか。あの不気味な白い花はジャスミンだったのか。いやあんな場所に生えているから不気味なだけで、実際は綺麗な花なんだろう。言い匂いもするし。

「でもジャスミンって、五月の花ですよ。こんな冬に咲いていられるんですか？ それに鑑賞用が主なんじゃ……」

と今度は由理が山本に聞いた。

「確かに一般的にはそうらしいがな、あれは希少花でな。冬でも生きていけるし、外気や日光に当てても平気なんじゃよ」

「へー」

私は気持ちを声に出していた。

少しだけ場の空気が和んだ気がした。他愛も無い話をし、私は場をつないでいた。やがて

「入ります」

と声がした。

入ってきたのは、麻莉亜とカレンだった。

「先ほどは取り乱してすいませんでした。……気分が落ち着いてきたんでこつちに来ました」

麻莉亜はそう言い、国貞の隣にちょこんと座った。彼女の魅力的な大きな目は赤くなっていた。カレンは無言で誰も座っていない、テーブルに座った。顔は憔悴しきっている。

「大丈夫なのかい？」

国貞が麻莉亜に言った。

「はい……」

そういつつも麻莉亜は浮かない顔をしている。私とは逆のソファに座っていた武丸が立ち上がり、国貞の方へ寄っていった。

「団長、石川に帰ったらどうするんすか？」

武丸が国貞に言った。

「石川に帰ったら、まず警察に連絡しようと思ってる」

「マジですか？」

武丸はビクリした顔をした。

「どういう事だ？」

「俺思っすけど、警察に連絡したら、もう一回ここに来なきゃいけないったり、劇団の活動がしづらくなるじゃないっすか、だ

から……」

「武丸。その先は言うな」

国貞は武丸に言った。武丸が次に言おうとしている事は、私にも分かった。

「何故です？ 普通の人間ならば、こう考えるでしょ……無かった事にすれば良いってね」

「貴様っ！」

国貞は武丸の胸ぐらを掴んだ。

「ちよっと、暴力はいけませんよ」

武丸は国貞の手を掴みながら言った。

「俺は間違った事は言っていないっすからね……さ、離して下さい」

武丸は無理やり国貞の手を降ろさせた。

「合っているもんか」

国貞は吐き捨てるように言った。

「そうでしょうか？ ……じゃあ聞きますけど、マキさんはどう思いますか？」

「私？」

急に私は指され、たじろいだ。

「残念だけど、私は武丸の意見には反対だよ」

「へえ、あなたも偽善者ってわけっすか」

「何？」

「あなた達は偽善者っすよ……普通なら見過ごすはずなんだ、こんな事」

「それは違うよ」

「何が違うって言うんっすか？」

私は人と口論するのは苦手だ……それに彼は年下じゃないか。

「いいかい？ たとえこの事件を無かった事にして、一番迷惑になるのは誰か分かるかい？」

「はい？ ……そりゃ全員困ってると思うっすけど」

「違うんだ。一番困るのは山本さんだよ」

私がそう言つと、カレン以外の全員が山本と私の顔を見た。やはりみんな会話を聞いていたのだ。

「どういう事つすか？」

「このまま見過ごしたら、黒船に美代子の遺体が残つたままになるんだ、もしもそれを処理したら立派な犯罪だよ。山本さんが一番迷惑だ」

「あ……」

武丸は黙っていた。手を顎の下にしている。

「武丸君、もう止めなよ」

口を挟んだのは麻莉亜だった。

「もういいじゃない、そんな事」

「だって……麻莉ちゃん」

「いいから」

麻莉亜は言った。

完全に場は静まり返っていた。

眼をつぶっている国貞、不服そうな顔をしている武丸、困っている由理、疲れた顔をしている麻莉亜、顔をテーブルに突っ伏しているカレン、興味がなさそうな山本、そして……私。

無言の時間が過ぎ、七時を少し過ぎた七時十二分に船の船員が黒船に来了。

重い足取りで船に乗り、私達は石川県に帰った。船員に不思議そうな顔で見られたが、美代子の事は話さなかった（もつとも黒影十字軍を詳しく知る者は、一人いない事に少なからず不審を抱いただろうが……）

石川県に着いた私達はすぐに警察に連絡した。武丸の読みどおり、私達はもう一度黒船に行かなくてはなくなり、すぐに同じ船に乗った。

その後、黒船で長い事情聴取を終え再度石川県に帰る船の中で、年は明けてしまっていた。

私の心の中には黒い渦と、大きなひずみが生まれていた。

第一幕 回想―劇団員の自殺―（後書き）

ありがとうございます。

第二幕 劇団「黒影十字軍」(前書き)

第二幕です。

第二幕 劇団「黒影十字軍」

第二幕 劇団「黒影十字軍」

2007年1月27日

私は布団から出て、腕時計を見た。時刻はすでに三時四十分を回っている、どうやら私は長い時間回想をしていたようだ。回想をしている間、薄い膜が張られたように意識が遠くなっていたが、部屋の電話が鳴っていない事は分かっていた。念のため留守電を調べたが、やはり何も入っていないかった。

「そんなに早く電話来ないか……」

私は家にいてもやることなく最近、家から徒歩十分ほどの場所にある喫茶店『K』に行っている。もちろん贅沢に飲むことは無く、貯金から下ろした金を分配して使っている。

国貞からの電話が心配だったが、私は携帯電話を持ち歩いているので平気だろう。私は携帯電話から国貞へメールした。

「Kに行っている。何かあったら電話かメールをしてくれ」

こう書き、私はメールした。念のため留守番電話にも同様のメッセージを吹き込んだ。

私はクローゼットから茶色い上着、筆筒から黒いズボンを引っ張り出し着替えた。そして玄関のドアを開け、外に出た。

外の空気は冷たく、私の体を刺激していた。外の通りには、ほとんど人がいなく（みんな仕事に行っているのだろう）私は寂しく歩いた。

十分間も歩けば体も少し暖かくなっており、Kの前に着いたときにはちょうどいい体温になっていた。

Kはカウンター席が六つ、それにテーブルが四つあり、その一つに四人が座れるようになっていて。こじんまりした喫茶店である。

Kのドアに『OPEN』の札が掛かっているのを確認し、ドアを開

けた。

『カラン、コロン』

Kのドアを開けるとお洒落な鐘の音が聞こえる。

「いらっしやいませ……あつ！ 牧野さんですか？ 最近良く来ますね。ありがとうございます」

店員の石川紗希が話しかけてきた。黒髪をリボンで二つに分けて結んでいる。体系は細めでとても可愛らしい。彼女は自分の事を『ウチ』と言う。Kは紗希と紗希のお父さんが店にいるが、お父さんは今病気で店内にはいなく、紗希一人で経営している状態だ。

「ごめんね、最近良く来ちゃって」

「そんな事無いですよ、この時間帯は人があんまり来なくて……えへへ嬉しいです」

紗希は手を頭の上に置き、可愛く笑う。

「そうなのかい？ まあこんな時間帯に来るのは私ぐらいなもんだろうね」

「そうですね」

私はカウンター席に座り

「今日もコーヒー頼むよ」

と言った。

「はい、分かりました」

紗希はそう言い、コーヒーメーカーに手を伸ばした。

「では出来るまでしばらくお待ちくださいね」

「うん」

私はそう言い、カウンターに肘をついた。数分すると出来立てのコーヒーが目の前に置かれた。

「あの……牧野さん？」

「ん？ なんだい？」

私はコーヒーを一口飲み答えた。

「牧野さんは『黒影十字軍』の脚本家をやっているって言ってましたよね？」

「うん……今は休職中だけだね」

「なぜ脚本家になろうと思ったんですか？ 一代目の劇が好きだったんですか？」

「いや、そんなわけでは無いよ。劇団長とは昔から知り合いでね、それで仕事も無かったからやってみたんだ。元から話を考えたりするのは好きだったからね」

「そうだったんですか……」

私はもう一つの質問に答えて無い事に気づいた。

「黒影十字軍の一代目？ ああ、そういえば私達は二代目だったね。見たことないな」

「そうなんですか？ ウチは見たことあるんだけどな」

「え？」

紗希は私より若いのか？ 心の中で思った。

「あ、もちろん生で見たわけでは無いですよ？ 昔のビデオテープで劇を見ただけでして」

「成る程ね、じゃあ少し話し聞かせてもらっていいかな？」

紗希はビツクリしたような顔をした。

「え？ 話っていつでも何を話せばいいのかな。えっと……劇団員は三人で主にコントばかりやっていましたね」

紗希は左手で頬を触りながら喋っている。そういえばこのような会話を国貞としたような記憶があった。

「へー。今の十字軍とは正反对だね」

「そうですね。今は真面目な劇をしていますもんね」

紗希がそうだったので私は思った。『トーテックロイツ』ぐらいしかまだ劇をやっていないな。

「劇団員は三人か。確かに少ないな、どんな人がやっていたんだい？」

「名前は覚えていないんですが、おじさんが二人に綺麗な女の人がい一人いて、それで……それで劇をするの」

紗希は目を光らせている。

「ははは。私も見てみたいな」

私は適当に相槌を打った。

「そつえば……」

私は少し気になる事があつたので紗希に質問した。

「十字軍の一代目が活躍していた時期って何年前ぐらいなのかな？」

私は国貞とはプライベートでは、劇団の話などしないので全く知らなかったのである。

「だいぶ前の話ですよ。今から二十年前ぐらいじゃないでしょうか？」

「二十年前か。じゃあ一代目劇団員は……そつえばおじさんが二人って言ったね？ その一人は国貞のお父さんだね」

国貞のお父さんは死んでいることは分かっている。その時に二代目を継いだのだから。

「国貞さんって、今の十字軍の団長ですよね？」

「ああ」

この話題は深く掘り下げることも無く、すぐに話題は変わった。

「今、一代目劇団員は何してるんでしょうね？ 今も生きていたら七十歳ぐらいですね。女の人は分らないです。元が何歳かは分らないので」

「ふーん」

私は頷いた。

ブルルルル…

その時私の携帯電話が鳴った。

液晶画面の発信者を見ると、思ったとおり国貞だった。

「ちよつとゴメン電話」

私はカウンター席を立ち、奥のトイレに向かおうとした。

「彼女ですか？」

紗希が笑いながら言ってきた。

「いやいや、違うよ」

私は苦笑いしながらトイレに入った。

私はトイレの大便所に入った。携帯電話を手に取り、通話ボタンを押した。

「はい」

「もしもし、康明か？ 僕だ。国貞だ」

「いやいや分かってるよ。携帯に表示されてるから」

私は言った。狭いトイレなので声がこだましている。

「さっき話したこと覚えてるよね？ 一応劇団員全員に電話してみたんだよ」

「ああ。そうだったね。それで結果は？」

私はてつきりみんな断ったと思っていたが、国貞の答えは私の考えを裏切るものだった。

「電話で確認したんだけど、みんな劇団を復活したいと言っていたよ」

「え？」

どういう事なのだろうか、何故みんなそんなに劇をやる事を拒まないのだろうか？

「国貞、ちよつといいか？」

「ん？ 何？」

「あのさ私はともかく、由理や武丸、麻莉亜やカレンは劇団をやらなくても、個人的に仕事があったはずだよね？」

「そう……なるね」

「だったら何で仲間が死んだっていうのに、みんな劇をやるうとするのかな？」

「さあ……僕には。僕はただまた劇がやりたかっただけで……」

「君もそうだよ」

私はズバリと言った。

「どういう事？」

国貞が言った。

「君も劇団を復活させたいんでしょ？」

「僕は二代目の団長さ。お父さんから引き継いだ責任もあるし」

「君のお父さんはもう死んだんだよな？」

「ああ。……でもそんな事、今はどうでも良いじゃないか」

「まあそうなんだけど」

私がそう言つと、数秒の沈黙が流れた。

「ところで康明、君は今何をしているんだ？」

「え？ 今は……国貞は来たことあつたっけ？ 喫茶店のKにいるんだけど」

「ああ……懐かしいな」

「覚えているかい？」

私は国貞に聞いた。

「ギリギリ覚えてる」

「最後来たのはいつだったっけ？」

「そこまでは覚えていないよ。ギリギリって言ったじゃないか」

国貞は少し調子いい声で言った。

「Kか……」

その後、国貞は少し考え、

「僕もそっちに行つてもいいかな？」

と言つた。

「え？ 何で？ 別に来るのは構わないんだけどさ、何か用があるのかい？」

「ああ、劇の事で大事な話があるんだ。いいかな？」

「あ……うん。分かった。じゃあ来てくれ」

「悪いな」

そう国貞が言い、『プツツ』という音がし、電話が切られた。

「急にきりやがった」

私はトイレに掛けられた鏡に目を通し、自分の顔を見た。細身の顔、小さな鼻と唇。いつもとさほど変わらない顔だが、落ち窪んだ疲れた目をしている。洗面器の蛇口をひねり、水で顔を軽く濡らした。

「疲れているな」

私はトイレのドアを開けた。

Kの店内に戻ると、紗希がこちらを見ていた。あいかわらず店内には客はいない。

「電話長かったですね」

「ああ、ちよつと友人が来ることになった」

「え？ そうなんですか？ 誰ですか？」

紗希は質問攻めをした。

「今の十字軍の団長の、国貞だよ」

「え？」

「何か劇の大事な話があるみたいで」

「ちよつと待つてください。また劇を始めるんですか？」

紗希は目を大きくして聞いてきた。

「そうみたいなんだ」

私は声を小さくして言った。

「だって、その……あんな事があったのにですか？」

石川県では『あの事件』は有名になっている。紗希が知っていても不思議では無かった。

「私は反対したんだよ」

「でも……」

「もう分からないよ」

私は本当に訳が分からなかった。

「ミルクレープ頼むよ」

私は紗希にそう言った。

「はい？ ……分かりました」

紗希は眉を少し顰めて言った。そんな顔を見たのは初めてだった。

数分するとミルクレープが私の前に来た。小さいので私はフォークで、チビチビ切りながら食べていた。

『カラン、コロン』

玄関から鐘の音が聞こえた。私は玄関を見ると、国貞と帽子を被った男が入ってきた。

「康明、来たよ」

「ああ、国貞か。会うのは久しぶりだな」

私はそんな事より後ろに立っている、男の事が気になっていた。

「国貞？ その人は？」

「ああ……そうなんだ。さっき大事な事があるといったよね？ その一つに彼が関係しているんだ」

「そうなのか？」

「とりあえず、テーブルに座ろうよ」

私と国貞と帽子男は奥（玄関とは逆のトイレ側）のテーブルの椅子に座った。とりあえずコーヒを二人分頼んだ。すると帽子男が帽子を取り、声を出した。

「佐藤勇次といます。よろしくお願いします」

帽子男は黒の長髪をおでこで分け、大きな目と薄い唇。鼻が小さく、顎にはホクロがついている。

「え？」

私は初対面の青年に、突然自己紹介されビックリした。この年で初対面の人と会うのはあんまり無いからだ。

「国貞？ 彼は？」

国貞の方を見ると、ニヤニヤしている。

「ビックリしたかい？ 彼は佐藤君といってね、僕の知り合いの息子なんだ」

「え？」

私はそう言つと、勇次が喋りかけてきた。

「十字軍、毎回見ていました。先月あんな事が起こったのは残念だったと思いますが、また復活するという事で嬉しいです。僕も一緒に行きますから」

「は？」

私は意味が分からなかった。

「どういう事だ、国貞？」

「え？ どういう事って？ あ……君には言っていなかったけ？」

「何？」

「実は明後日に、黒船に稽古をしにいく事になったんだよ。復活のためにね」

国貞はスラスラと言った。

「ちよつと待ってくれ、私は聞いていないぞ」

「だから、『言っていなかったっけ？』と言ったじゃないか」

「私以外の劇団メンバーは？」

「大丈夫ということだ」

「……………」

国貞は表情を崩さず言った。

「大事な話を始めていいかな？」

「……勝手に」

私は声を低くして言った。

「まず勇次君だ。彼は今年で19になる自称大学生だ。それで十字軍のファンだというから、バイトとして今回来るようになったんだ」

勇次は私に軽く頭を下げた。

「脚本家の牧野さんですよね？」

「ん？ そうだが？」

「他の人には何て言われているんですか？」

「は？」

勇次は何を言っているのだろうか？

「どういう意味かな？」

「いや、あだ名は何かあった」

勇次は軽く笑った。

「え？ そうだな、こいつ」

私は国貞のほうへ指をさした。

「国貞からは『康明』他の劇団員からは『マキさん』かな」

「なるほど……じゃあ僕は『ヤスさん』と呼んでいいですか？」

牧野康明だから『ヤス』という事なのだろうか？ こんな脚本家の名前も知っているとは、本当にファンなのだろう。

「まあ、違和感ないしいいよ」

「はは、ではヤスさん。あ、僕は勇次でいいですから」

そう言っただけでまた笑った。何故か私はこの青年『勇次』に好印象を持つようになってきた。

「康明。勇次君はなかなかいい奴だろう？ よろしく頼むよ」

「ああ」

私は返事をした。

「国貞、話はこれだけなのか？ そんなに大事だとは思えなかったが？」

「あ、ヤスさん。酷いです」

勇次はすかさずそう言った。

「いや、違う。劇団の事と言っただろう？ 本題はここからなんだ」

国貞はそう言っただけで声を小さくした。

「実は……『ハート役』の事なんだ」

「あ……」

そう言っただけで、私は考えさせられた。劇団を復活させるといっても『ハート役』がいないのだ。

「国貞、勇次はバイトで来るんだろう？」

「ああ、色々雑用してもらっただけ」

勇次の方を見ると苦笑いしていた。

「じゃあ、他の劇団員の変更はないんだよね？」

「ああ、前と同じさ」

「じゃあ……ハート役はどうなるんだ？」

「ああ、やっぱり分かったか」

国貞はそう言っただけで、紙を取り出した。

「いいかい？ 今の劇団員は、由理、武丸、カレン、麻莉亜、そして私だ」

そう言いながら万年筆で書いていく。

「うんうん」

「そしてハートの役柄がぼっかりと空いている。カレンがディア役

で麻莉亜が役が無かった訳で……」

「あ！　そうか。という事は、舞台経験の長い、カレンがハート役になるのか？」

「いや、違う」

国貞ははつきり言った。

「どういう事だ？」

「僕はあえて、麻莉亜をハート役にしようと思う」

「は？　何を言ってるんだ？　ハート役は一番重要な役じゃないか？　言つとくけど私はまだ劇団を復活なんて賛成じゃないからな」

「いいか？　カレンを役柄を変えたりしたら、あまりにも露骨だろう？　だったら今まで舞台に立ったことの無い麻理亜が、ハート役になったほうが新鮮じゃないか」

「ああ……」

私は確かにそう思ったが、後半の質問を無視されたのは気になった。

「あのな、国貞」

「あ！」

大きな声を上げて、国貞は時計を見た。

「もう六時半では無いか！」

私も銀の腕時計を見ると、六時半を示していた。

「僕は早く帰らなくては」

「は？」

「僕は忙しいんだ。明後日だからね。頼んだよ、勇次君も」

私と勇次に軽く頭を下げ、カウンターにいる紗希に「ありがとう」

と真面目に言った。そうして国貞は急いで、Kから出て行った。カラコロンと寂しく鐘の音がした。うまく帰られてしまったようだ。「忙しい奴が、こんな店に来るわけないだろ」

私がそう言つと、勇次が苦笑いし、紗希が悲しそうに顔を伏せた。

「あつ。そういう意味で言ったんじゃないやあ無くて……」

私は下を向いた。

国貞が帰った後、私は勇次とテーブルにいた。

「ヤスさん、あ！ やっぱり馴れ馴れしいですかね？ 今日始めて会ったのに」

「いやいや」

私は苦笑いをした。

「私も勇次つて言わせて貰うからさ」

「はあ、そんなもんですかね？」

「ああ。そんなもんさ。……君はやっぱり人気があるんじゃないのか？」

「はい？」

「とても話しやすいしさ」

「はあ、いやあんまり人と話したこと無いんですよね」
話した事無いのに、こんなに親しみやすいものなのか？

「そうなのか……私は人見知りでね」

「そんな事無いです。ヤスさん、とても話やすい人で」
そんな事言われたことが無かったので、嬉しかった。

「学校は楽しいかい？」

私は何気ない質問をした。

「え？ ああ、いや、その」

勇次は明らかにおかしい反応をした。

「どうしたんだ？」

「いや、その……実は大学生なんかじゃ無いんですよね」
「え？」

「本当は去年中退して、今はフリーターです」

「ええ？」

どういう事なのだろうか？

「何でそんな嘘ついているんだ？ 国貞は知っているのか？」

「いえ……知らないと思います。そんな事言ったら国貞さんに、何を言われるのか」

「そつえば、勇次は国貞とどのように知り合っただ？」

「はい？ お父さんが国貞さんと知り合いで、ですね。黒影十字軍

は以前から知ってたので、父さんを通じて知り合えたんです」

なるほど、先ほど国貞が『知り合いの息子』と言っていたのは、そういう事だったのか。

「なるほど……」

「僕からも、一つ聞いていいですか？」

「どうぞ」

「今回の稽古場、黒船についてどう思っていますか？」

「は？」

唐突の質問だった。

「黒船っていったら、一ヶ月前に……」

「ああ、そういう事」

質問の意味が分かった。

「黒船に行くのは全然大丈夫だと思うけど、そもそも復活が私は反対だったからね」

「さつきもそんな事言っていましたね」

「みんなの気が知れないよ」

私は本心を言った。

「……美代子さんの自殺、どう思っていますか？」

「え？」

「あついや……すいません。変な事を聞きました。」

「いや、そうじゃないんだ」

私は焦って言った。

「何で勇次がそんな事興味があるのかと思って」

「僕、少し心辺りがあるような気がするんです」

「は？」

私は意味が分からなかった。

「だって君は関係無かったじゃないか？」

「いえ、そうでは無くて」

「ん？ 良く意味が分からないんだけど？」

「ネットに『しがなハート』というブログがあったんです」

「聞いたこと無いな」

「誰が立てたのかは分からないんですが、内容的に十字軍メンバーが立てたとは思えない内容だったんです」

「はあ、それで？」

きつとメンバー内しか分からない事が書いてあって、それが根拠なんだろう。

「簡単に言っと、『ハート役の人間が執拗にいじめられている』という内容だったんです」

「何だつて？」

「僕は、誰かの妄想とかでは思えなくて……」

「それで、そのブログは？」

「それが……美代子さんが自殺した時期に閉鎖したみたいで」

「どういう事だ？」

「知らないです。誰が立てたのかも分からなくて」

これは初めて知る事だった。十字軍メンバーしか分からない事が書いてあったのだったら、これは大変重要な事なのかも知れない。

「あの……」

不意にカウンターから紗希が言った。

「そろそろ、閉店の時間なんですが……」

「え？」

私は銀の腕時計を見た、時刻は七時だった。

「あ、そうか。君一人の時は七時が閉店だったわけ？」

「はい……すみません」

「あつ、いや私の方こそ毎日来てすまない」

「それは全然構いませんから！」

紗希はニツコリと笑い、頭を下げた。

私と勇次はKのドアを押し、家路についた。後ろからはカランコロンと鐘の音がした。

私は帰る方向の違う勇次と別れ、真っ直ぐ家に帰った。最近では

家にいてもつまらない私が、今日は気分が少し良かった。

勇次……今日会った彼の事が頭から離れなかった。私はこの歳で仲の良い知人は、ほとんどいない。国貞ぐらいのものだ。何故だろう？何故私は彼をこんなに気にいつてるのだろうか？彼は私の事をどう思っているのだろうか？

今日起こった事といえば例のブログ。美代子の自殺した事に関係あるのだろうか？

私は今日の事を反芻しながら、床についた。

2007年1月29日

結局昨日（国貞、勇次とKで会ったのは一月二十八日）はいつも通り、Kに行き紗希と話しながらコーヒを飲んだ。そしていつも通りに家に帰り、今日の支度をして寝た。

そしてあつという間に今日、つまり黒船に向かう日になっていた。黒船は石川県の端にある、埠頭から船で行く。前にも説明したが、普通に運航して約二十～三十分かかる。埠頭には、私の家からは車で一時間ぐらいかかる距離だったので、国貞が車で向かえに来ることになっていた。

ブルルルルル、携帯電話が鳴った。発信者はもちろん国貞だった。

「はい」

「僕だ、国貞だよ」

「分かってるって、画面に出てるから」

「今、下の通りに車にいるから」

「分かった、悪いね」

「ああ。早く来てくれ」

そういつて国貞は電話を切った。私は前日に用意していた鞆、そしていつもの茶色い上着、黒いズボンを着て外へ出た。

下に降りると、派手な紫色の小型車が止まっていた。一目で国貞の車だと分かった。コンコンと窓を叩き、中へ入った。

「おお、康明」

「あつ！ ヤスさん」

入ると同時に二人の声がした。国貞と勇次の声だった。国貞が運転席に座り、勇次が後ろの席に座っていたので、私は国貞の隣の助手席に座った。

「やつぱり勇次もいたんだ」

「ああ。だって一人じゃあ、あんな所にいけないだろ。康明だって僕の車に乗って行くのに」

「ヤスさんは車を持ってないんですか？」

「うるさいな」

私は勇次の頭を軽く叩いた。

「あ。今日は朝から元気ですね。そんな元気出しちゃあ、持ちませんよ？」

「勇次もバイトなんだから、頑張れよ」

私は言った。

「じゃあ、そろそろ行きますか？」

「うん」

国貞が言ったので、私は返事をした。紫色の小型車はゆつくりと、ゆつくりと動き出した。

ここから埠頭までは一時間の距離なので長い旅になる。紫車は近くの通りを抜け、多くの車が通る大通りに出た。

「さて、と。これから先は、ほとんど真っ直ぐの一本道だからね。

退屈になるぞ。ふああーあ」

国貞はあくびをしながら言った。

「でも、あんまり混んでないね」

「ホントだ。これだったら、いつもより早く着くかもね」

そう国貞が言った。

「あれ？ ちょっと待てよ？ 今日って月曜日だよな？」

ハッとしたように、国貞が言った。

「え？ あ、うん。そうだけど？」

私は返事をした。

「勇次君、学校は？」

国貞がそう言ったので、私と勇次は同時に吹き出した。

思った通り車の流れは速く、紫車は予定の時間よりも十五分も早く埠頭に着いた。埠頭前の駐車場に紫車を停め、私達は外に出た。

「うわぁ、寒いねえ」

私は思わず、声を出した。家の周辺の気温とは比べ物にならないほど、風が冷たく寒い。やはり海が近いからなのだろうか。前面に広がる濁った青色をした海からは、風とともに潮の匂いがする。

「本当ですね、ううーさぶい」

勇次は両腕を肩につけて、小さくなっている。

「こんなじゃ、早く来ることなんかなかったね。船はあるのかな？」

国貞は寒さを感じない（あるいは我慢？）のような声で言った。

「分らない、と、とにかく向こうへ」

私達は奥へと進んだ。

倉庫が並ぶ道を進むと、中型船が泊まっていた。この中型船は外側のエリアと内側のエリアに分けられている。外側は普通の船と同様、手すりなどがあるだけ。内側は外側から階段で下に降り、小さな会話室、キッチンなどがある。定員数は十人ほど。勇次を含めた十字軍メンバーが七人、船員が三人乗っている。

「あれ？ 船あるね。もう乗っても良いのかな？」

私がそう言っていると、中から由理とカレンが出てきた。

「マキさん！ 久しぶりです」

由理は私に話しかけてきたが、彼はとても疲れた顔をしていた。

「由理、久しぶりだな。……何か疲れてないか？」

「はい？ あぁ、何か最近色々大変でして、マキさんも疲れた顔してますよ？ やっぱり、大変でした」

「あぁ、そういう事ね。私も大変だったさ」

そう言うと、二人で苦笑いした。

「みんな大変大変って言うけど、あたしは楽だったね！」

カレンが間に入って言った。

「え？」

「あたし、実家に戻ってたから」

「なるほどね」

私がそう言つと、由理が

「とこれで、その彼は？」

と言つて、勇次の方を見た。

「え？　ちよつと……国貞さん。もしかして他の人にも伝えてないんですか！」

勇次は国貞の方を見て言った。

「ん？　ああーそうだった、忘れてた」

「ヤスさんにも伝えてなかったじゃないですか！」

「いいじゃないか、また自己紹介すれば」

「はあ」

勇次はそう言つて、前へ出た。

「佐藤勇次と言います、今回はバイトで参加させてもらう事になりました。よろしくお願いします」

「バイト？　へー珍しいね、そんな事。勇次君？　あたしはダイア役の夢見カレン。よろしくね」

「僕は、スピード役の由理かもめ。よろしく」

「は、はい。よろしくお願いします。はあ、あの……」
と勇次は言った。

「何？」

「そろそろ中に入りたくて、寒い寒い」

「やれやれ、すごいバイト君だ。内部に暖房があるから、行こうよ」
由理がそう言つたので、私達は後について行き、会話室へ入った。

会話室は十畳ほどの木製の部屋。テーブルや椅子、暖炉や窓といった物がある日常的な部屋だ。

会話室は十分に暖房が入っていて、気持ちよかった。

「寒い日の暖房って気持ち良い」

私はそう言葉にした。そしてテーブルの椅子に座った。椅子にみんな座ると、国貞が質問をした。

「そういえばさ、僕らは予定より早く着いたんだけど、何でもう集合してるのかな」

「え？ ああ、僕もいつもよりすごく早く着いたんです。だからみんな早く集まったんじゃないですか」

と由理が言った。

「成る程ね。じゃあ君ら以外にも、みんな集まっているの？」

「はい。団長等が最後でして……麻理ちゃんと武丸君は、上にいるんじゃないかな？」

「なーんだやつぱりみんな揃ってたんだ、僕らが一番かと思ったんだけど」

「いやいやいやいや、国貞さん。何を言ってるんですか、外はあんなに寒かったんですよ？」

と勇次が言った。

「あ……勇次。麻理亜と武丸にも挨拶に行くぞ」

「うわっ。ずるいなあ」

勇次はそう言い、私は苦笑いをした。

そして国貞と勇次は会話室から出て行った。

私と由理、カレンは部屋に残った。

私は二人の顔を見て気になっていた、あの質問をした。

「由理とカレン、私の話を聞いてくれるかい？」

「はい？」「何ですか？」

由理とカレンは同時に返事をした。

「今回の劇団復活のための稽古、二人はどう思ってるんだ？」

「あつ！ やつぱりその事ですか？」

と由理が言った。

「やつぱりとは？」

「あの……僕も最初は疑問でしたよ。何でこんなに早く再活動するのかって」

隣のカレンも爪をを噛みながら、頷いている。

「やっぱりね、私なんかギリまで反対していたんだ」

「でもやっぱり団長は団長じゃないですか、この十字軍の。止めたくないって気持ち僕には分かります。それに……」

「それに？」

「団長から電話があつたんです。『お願いだから、頼む』って。そこまで言わなくなつて、僕は賛成してたかもしれないですけどね」
「ははは、そうなんだ……（おいおい、私はそんな事言われてないぞ）」

国貞は一応の信頼があるらしい。ちょっと安心した。

「カレンは？」

「あたし？」

爪を噛んでいたのを止め、返事をした。

「あたしはね、正直復活するのが遅すぎるぐらいな気持ちなの」

「え？」

私は変なところから声が出た。

「どういう事？」

「私って、今ダイア役でしょ？　それで麻莉亜が役なし」

「うんうん」

「分かります？　一番良い役であるハート役だった美代子。そのハート役がぽっかり空いた今、格上げて形であたしがハート役になるわよね。だからいつ復活しても良かったわけ」

……あれ？　これに似た話を聞いたことがあるような。あ、ああそうか二日前にKでだ。でもその時は確か……

『は？　何を言ってるんだ？　ハート役は一番重要な役じゃないか？　言つとくけど私はまだ劇団を復活なんて賛成じゃないからな』
『いいか？　カレンを役柄を変えたりしたら、あまりにも露骨だろう？　だったら今まで舞台に立ったことの無い麻理亜が、ハート役

になったほうが新鮮じゃないか』

『ああ……』

こんな会話をしてたっけ？　って事は。

「カレン」

「はい？」

「……残念なだけどさ」

そのあとの事を言おうとした時、会話室のドアが開いた。

「どうもー。マキさん、久しぶりです」

先ほど出て行った、国貞と勇次、それに麻莉亜と武丸が入ってきた。今喋ったのは武丸のようだ。

「ああ、武丸？　久しぶりかな」

武丸は前と変わらず、黒髪の長髪。尖った目をしている。

「かな？　ってどういう事です？　最後に会ったの一ヶ月前ですよ？」

「はは……一ヶ月前の事は精細にまだ覚えているから」

「ああ、そういう事っすか」

武丸は首を縦に振った。隣にいた麻莉亜が前に出た。長い黒髪が綺麗に揺れている。

「あの、久しぶりです。あたし、この一ヶ月怖くて怖くて」

「え？」

「ずっと怖かったんです。でもまたみんなと会えて、嬉しいです」
麻莉亜の大きな目は少し濡れている。

「頑張つて、麻莉亜」

「？　はい分かりました」

私はこのあと国貞が話すであろう事を予想していたので、こう言っ
た。

国貞達が来たので、この十畳ほどの会話室には黒影十字軍のメン
バーが集まった事になる。

「あの……マキさん？」

カレンが私に喋ってきた。

「ん？」

「さつき『残念なんだけどさ』って言いましたけど、何ですか？」
「ああ」

私は国貞の方を見て、目配せした。国貞は頷いた。

「みんな……聞いてくれるか？」

国貞が会話室にいる全員に言った。それほど大きな声では無いが、ゆうに聞こえる。

「今回、みんなまた集まってくれて本当にありがたいと思っている」
「何ですか、いきなり？」

由理が声を上げた。

「あの、マキさん？」

「いいから、聞いてて」

カレンが再度話しかけてきたので、私はそう言った。

「みんなも気付いているかと思うが……もう去年の話だ」
そう国貞が言うと、みんな顔を少し曇らした。

「メンバーが一人減った、ハート役が無くなった。その事だ」

「ああ、そういう事ですか」

国貞がそう言うと、カレンがそう返事をした。国貞がカレンを見ながら、

「ハート役は新しく、麻莉亜にやらせようと思ってる」
と言った。

「え？」

カレンがビックリしたような声を出した。

「私？」

麻莉亜は声が裏返って、大きな目はパチクリしている。

「ちょ、ちょっと待ってください」

とカレンが言った。

「舞台歴で言ったら、あたしの方が麻莉亜より長いし、てゆーか麻莉亜は舞台に立った事無いじゃない」

カレンは国貞に言っているようだった。

「だからこそなんだ、カレンがハート役になったら露骨すぎるんだよ。カレンはダイア役として定着してる。麻莉亜はまだ舞台に出た事なかったから、一番自然なんだ」

「で、でも、あたしは納得できません。だ、だって……」

「ふふふ……見苦しいですよ、カレンさん」

少し憂いを含んだ笑いで麻莉亜は言った。さっきのビックリした感じも演技なのか？ この展開を見越していたのだろうか？

「な、何ですって？」

「私はまだ劇に出た事が無いんですから、良いじゃないですか」

「麻莉亜、あんた……」

カレンは何かを言おうとした、その時、

「黒船に到着しました、皆様、長旅ありがとうございます」

会話室に船員が入ってきた。

「ああ、ありがとう。今回も」

国貞は船員の方に振り返り、そう言った。

由理と国貞が最初に出て行き、私と勇次の前をカレンと麻莉亜が通って行った。

「いやあー女は怖いっすね。あんなに綺麗な人達が」

後ろで武丸が小さく言ったのに、私は気付いた。（お前の言動が怖いよ）

船から降り、黒船についた。黒船は劇場が一つあるだけの小さな島。電話は電波が通じず、石川県に浮かぶ絶海の孤島という事になる。

「三日後にまた迎えにきますので、良い時間をお過ごしくださいませ」

船員はそう軽く言い、船に帰った。私達を乗せていた中型船は、水平線をゆっくり進み、数分後には見えなくなっていた。

「三日後といえば、二月一日だね。今月は三十一日までであるから」と国貞が言った。

私達は停留場の前の砂利道を進み、劇場についた。劇場までの道は一本道なので迷う事も無いし、引き返すのも簡単だ。

劇場前についた私は劇場を見上げた。一ヶ月前に姫嶋美也子が自殺した場所。その瞬間、心の中にドクドクとした感覚が湧き出てきた。人に恋をしたのとは全く違う、とても不安なざわめき。

黒い劇場は私の前に姿を変えず、そびえ建っていた。

第二幕 劇団「黒影十字軍」(後書き)

ありがとうございます。

第三幕 劇場「黒船」(前書き)

第三幕です。

第三幕 劇場「黒船」

第三幕 劇場「黒船」

「全然変わってないな」

玄関前で国貞がそう言った。

「そうなんですか？ 始めてきたから、僕は分らないですね」と勇次が言った。

「こんな所に一人で住んでるなんて、信じられないっすよね。あー勿体無い」

武丸が言った。

私達は色々喋りながら、黒船の玄関の前に行った。

黒船の玄関扉についてあるチャイムを国貞が押した。ピンポーンと、どこでもある音が鳴った。しばらくすると中から上下鼠色の寝間着を着た、山本老人が出てきた。

「ああ、あんたらか。早かったな」

私は銀の時計を見た。家を出たのが午前九時、埠頭に着いたのが、午前九時五十分ごろ。そして今は午前十時二十分だ。確かに予定より早いと思う（車が空いてたから）

「山本さん。先日、いきなり連絡してすみません。また三日間お世話になります」

「ああ、別に構わんよ、こんな所に来る人なんかいないしのお」

と山本は笑いながら言った。

山本老人は手をドアの方に指し、

「中へ」

と言った。

「じゃあ、お世話になります」

由理がそう言い、中に入った。武丸、勇次、カレン、麻莉亜も後に続く。

「おい国貞」

私は気になる事があったので、国貞に質問した。

「さつき『連絡』って言うてたけど、どういう事だ？」

「え？」

国貞はポカンとした。

「黒船には電話が通じないんだったよね？　じゃあどんな連絡を山本さんにしたんだ？」

「ああ、そういう事ね」

国貞は頷いてこう言った。

「実はさ、二日前の時点でまだここに来る事は決まっていなかったんだよね」

「え？」

「覚えているか？　二日前のKの時」

また二日前のKか……確か

『実は明後日に、黒船に稽古をしにいく事になったんだよ。復活のためにね』

国貞はスラスラと言った。

『ちよつと待ってくれ、私は聞いていないぞ』

『だから、『言っていなかったっけ？』と言ったじゃないか』

『私以外の劇団メンバーは？』

『大丈夫ということだ』

『……………』

こんな感じだったかな？

「ああ……って事は？」

「そう、昨日山本さんに会いに行っただ」

「何を馬鹿な。山本さんがもし断ったらどうするつもりだったんだ？」

「いや、断れないという思惑が僕にはあった」

「何だと？　それは？」

「そんな事は教える意味ないじゃないか。とにかく他のみんなもこの事を知らないから、黙っててね」

「……ああ」

私は納得のいかない感じで返事をした。

「おい。早く入らんか」

山本老人が扉の前で声を上げている。

「はい。今行きます。……康明、じゃあ頼むよ」

国貞は後半を小さな声で言った。そして私達は黒船の中に入っていた。

黒船の中は電灯が点いていなかったが屋上がステンドグラスであるのと、まだ時刻が昼前という事もあって明るかった。

「とりあえずさ、劇場を見に行きたいと思わないかい？」

国貞が全員に問いかけた。

「ああ、それいいですね」「行きましょう」

口々に言う中で、山本老人が

「わしは、管理人室にいるから勝手にやつとくれ。昼になったら軽い食事作ってやるから食堂に」

とだけ言って、管理人室に引っ込んだ。

「あ、はい。分かりました」

国貞はそう言って、ガラス廊下を渡りに前に進んだ。

「あの……ヤスさん？」

勇次がおもむろに私の肩を叩き、そう言った。

「え？ あ、なんだい？」

「僕、この構造が分からなくて不安なんですが」

と勇次が言った。

「そうですね、マキさん。勇次君に部屋とか案内したらどうですか？」

「そうだな康明、頼んでいいかな？」

由理と国貞が言った。

「ああ、問題ないよ」

私は無理を言うでもなく、そう答えた。

「じゃあ、お先に失礼しまっすよ」

武丸がそう言った。

カレンと麻莉亜は先ほどから一言も喋らない。

私と勇次を抜いて、国貞、由理、武丸、麻莉亜、カレンの五人はガラス廊下を渡って行った。

「さて、と」

私は勇次の顔を見て言った。

「すいません。ヤスさん」

「いやいやいや。そんな事ないさ。ただここはちょっと複雑だからさ、覚えられるかなって」

「ああ、そういう事ですか」

「まあ、とりあえず分かりやすく説明するために一回玄関に行くよ」
「はい」

私達は玄関に戻り、案内する事にした（尚、これから説明されるのは『外から玄関を開けた場所』から見てとする）

「いいかい？　ここが玄関だ。さっき入ってきたところだよ」
「はい」

「見てもらえば分かると思うけど、ここは二階建て。玄関入ったらすぐにこのホールで、正面の階段で二階に上れるんだ、それでこのホールは吹き抜けになっている」

「なるほどです。天井がステンドグラスになっていますね」

勇次は天井を見ながら言った。

「でもヤスさん？　ちょっと聞いてもいいですか？」

「ん？　何かな？」

「気になっていたんだけど、なんでこここのステンドグラスの模様は『トランプ』なんですか？」

「ああ」

確かに私も前から気になっていた。黒影十字軍はトランプの模様を役柄名にしているが、こここのステンドグラスも何故トランプなんだろう？　初めて来たときからトランプだったし。

「さあ、私にも分からないなあ。気になるね」

「変な事聞きました。続きいいですか？」

と勇次は控えめに言った。

「ああ、分かった」

と言つて私は説明を再開した。

「分かりやすくするために、この館を三つのエリアに分ける」

「ふんふん」

「私達が今いる一階が『A』、二階が『B』、劇場側が『C』だ」

「はい」

勇次はメモを取っている。

「基本として覚えといてくれ、AにもBにも左右に必ず三つドアがあるんだ。この端二つのドアは客室で、真ん中のドアは特別な部屋になっている。トイレは一階と二階にあつて、一階のトイレはガラス廊下の左、右には山本さんがいる管理人室がある」

「質問です。左右つて事は、AにもBにも最低、六つのドアがあるつて事ですか？」

「そういう事」

私は頷いた。

「じゃあ、先に特別な部屋から説明するよ」

そう言つて私は一階の左の真ん中のドアを開けた。

「ここは食堂だ、さつき山本さんが言つていたよね？ 『昼になったら軽い食事作つてやるから食堂に』つて。それがここだよ」

「はい、成る程です」

カリカリとメモに書く音が聞こえる。

「じゃあ次ね」

食堂側から見ると、正面。つまり一階に右の真ん中のドアを開けた。

「ここは談話室。よく国貞と使わせてもらつていたよ」

「あ、そうなんですか？ 今回は僕もいるかもしれないですね」

「ははは、そうだね」

私達は談話室を出た。勇次がホールにある、吹き抜けの二階に通じ

る階段の方へ向かった。

「ヤスさん？ どうしたんですか？ 次は二階にいきましょうよ」

「ちよつと待って実はさ、その階段を使わなくても二階に行けるんだよね」

「え？」

勇次は立ち止まった。

「どういう事ですか？」

「そこが不思議な構造なのさ」

私はそう言つて、右の玄関側のドア（談話室から見ると左隣）を空けた。

「うわ、狭いですね」

空けた先は各寝室に続く廊下の一ブロックだった。私が空けたドアを閉めると、

「うわ。階段がありますよ」

ドアを開けたら死角になる場所に細い階段があつた。

「ここから上れば、二階の寝室ブロックの一つに出られるんだ」

「ええ？」

「食堂と談話室の隣に、二つずつドアがあつたの覚えてるかい？」

「え？ はい覚えてますよ？」

「ここは談話室から見て、左隣のドアだけどこに階段があるよね？ 想像してと思うけど、ここは『コ』の字廊下になっててこの先は右側のドアに繋がっているんだ」

「あ、はい、それは……何となく」

勇次は手を顎の下に添え、言った。

「そっち側にも階段があるんだ。そして食堂側の両端のドア、そこは『逆コ字』廊下になっているんだ。基本的にはこのこと同じで、寝室に続く廊下になっているんだ。そしてそこにもドアを開けた場所に二階に上がる階段があるんだ」

「確かに変わった構造をしていますね、難しいですね」

勇次は、メモにペンで細かく書いている。

「ちょっと整理していいですか？　ここの廊下が……」

「いや実際に見たほうが早いよ」

私はそう言い勇次を連れて、談話室右側のドアの階段を上った。上った先のすぐ右にドアがあり、それを開けた。そこはロビー二階吹き抜けだった。

「本当だ。ここは二階ですね、下はさっきまでいた所だし」

こここの位置は談話室の真上の位置という事になる。

「ちょっと周りを見てくれるかい？　分かるよね？　吹き抜け以外は一階と似ているだろ？」

「そうですね。ドアも三つずつありますし、特別部屋も二つありますね」

勇次はそう言いながら、周りを見渡した。

「じゃあ、ここの部屋も説明するよ」

私は左のドアを開けた。入った瞬間に、濃い匂いがした。インクと埃の匂いだ。

「ここは？」

「ここは図書室だよ。ちょうど談話室の真上の位置になるね」

図書室は、入った前にソファーと学級机が二つほどあり、奥に本棚があつて、たくさんの本がある。本は主に医学書や舞台関係の本のようだ。

「図書室ですか……？　何でこんな所にあるんでしょうね？」

「さあね」

勇次は興味を示したらしく、奥に進んでいった。正直言うと私はここにはあまり来たことは無い。国貞や他の劇団員と話す時は主に談話室を使っているし、本だらけのこの部屋には気味が悪くて進んで行こうとは思わない。それにこの図書室の独特の匂いはどうも苦手なのだ。

「僕って図書室の匂いって好きなんですよね」

「え？　変わってるなあ」

「……みんなに言われます。そんなに変ですか？」

「え？ ははは、そんなに変ではないと思うよ」

「ですよ？ 後はガソリンとか病院の匂いも好きなんですけど」

「……………（やっぱり変わってるよ）」

図書室には大きな本棚が三つほど連なっており、それにぎっしり本が詰まっている。私は前の本の欄しか見たことは無かったが、勇次が「ちよつと奥も見てみましょうよ」

と言つて奥の本棚に進んだ。私はそれを追つて本棚のへ行つた。一つ目、二つ目の本棚を通り一番奥の本棚についた。

「ヤスさん、これは何ですか？」

三つ目の本棚を右に曲がろうとして体を向けながら、勇次が言つた。「え、何が……あ」

私も右に曲がろうとしたとき、始めてみる物があつた。どの位の大きさだろうか。直径五十センチメートル、高さ十センチほどの小さな円形のテーブルが、進む狭い通路に置かれていた。

「これは？」

私はその小さなテーブルの上に置かれた紙に目を通した。

「賞状……ですか？」

勇次が紙を手にとつた。紙は黄ばんで汚れており、ほとんど読み取る事が出来なかつた。賞状の花模様の枠はプリントされていて残っている、これで賞状だと判断したのだろうか。

「何でこんな物がこんな所に？」

「え？ ヤスさんも知らないんですか？」

「うん。私はここにはあまり来ないから」

「なんなんですかね……これは」

私はその賞状を元通りにテーブルに戻し、本棚を引き返そうとした。「そろそろ戻らないかい？ ここにいるのはあまり好きじゃなくて」

私は濃い匂いが鼻に強くついて嫌だつたので、早く部屋を出ていたかつた。

「はい？ はあ、分かりました」

勇次は後ろからついて来た。私達は図書室を出た。

「さて、と。そろそろほとんどの部屋を確認したかな」

私達は図書室から出た先にいた。

「ヤスさん。向かいの特別部屋はまだ見てませんよ？」

「ああ、でもあそこは別に。見なくても大丈夫じゃないかな」

「何ですか？」

「あそこはただの浴槽だもん」

「浴槽……ですか？」

「風呂だよ風呂。トイレもついてるけどね」

「風呂ですか成る程、たしかに後で必ず来ますね。確か一階にもトイレってありましたよね？」

「そうだね、だからどっちでも行っても大丈夫だね」

「OKつと、こんな感じですか？」

勇次はさつきから書き込んでいた、メモ（黒船の見取り図）を私に見せた（fig1参照）。

「うん、そんな感じ。すごい分かりやすいよ」

私は素直に褒めた。

「でも僕気になる事があるんですが」

「え？ さつきの賞状かい？」

「いや、そんな事では無いんです。一ブロックにつき客室が三つづつある事になりますよね？ 僕の部屋はどこなんですかね？」

「ああその事ね、実は私もまだ聞いてないんだ。でも前回と同じ部屋になるんじゃないかな？ 君の部屋も後で決めるんじゃないかな？」

「そうですか」

勇次は頷いた。

「確かに国貞が言ったように、前と変わっている所はなさそうだね」
私はそう言った。そして

「じゃあもう大丈夫だよな？ 戻ろっか」

私は一階ホールに続く階段に向かおうとした。

「あ、ヤスさん。ちょっと待ってください」

「え？」

「どうせだつたら向こう側から下りましようよ」
と勇次が言った。

「そうだね。じゃあそっちから行こうか」

私達はその場所から真つ直ぐ進み、ドアから階段を通り一階に下りた。

「向こうの場所と同じような所でしたね」

「でしょ？ まあちよつと複雑だけど覚えられるよね？」

「はい。これがあれば完璧ですよ」

と勇次は言つて、自作の見取りを私に自慢げに見せた。

「ヤスさんにはあげませんよ」

勇次は笑いながらそう言った。

「ははは、面白い事言つな」

私は勇次の頭を軽く叩いた。

一階ホールに戻つた私達はとりあえず、先ほど国貞達が行つた劇場に行くことにした。劇場に行くにはガラス廊下を渡つていかななくてはいけない。なので渡る事にした。一步一步進んでいくうちに、嫌がようにも去年の出来事が脳裏によぎる。二十メートルのガラス廊下の真ん中（外へ出るドアがある地点）で私は不思議な光景を目にし、足を止めた。

「ヤスさん、どうしたんですか？」

「あ、ああ……」

ドアの外に広がる円形の花輪、それが一面赤く染まっていた。去年までは白い花（ジャスミンだったかな？）が一面に咲いていたのに、私はその派手な『赤い花』に連動し、もう一つの事を思い出した。去年美代子が目の前で二階から転落してここへ戻ってきた時、円形に咲いた白い花の上に、ポツポツと赤黒い物が付着していた。あの時はそれがとても不思議に感じたが、今はそれが全体に広がっている。

「どうしたんですかヤスさん、聞こえてますか？」

勇次が私の顔を覗き、そう言った。

「え？ ああ、ゴメン何でも無いんだ」

「何だかボケつとしてましたけど」

「本当に何でも無いんだ」

私は先に行くのを促した。勇次は私を見て不思議そうな顔をしたが、一番不思議に感じていたのは私だった。

私は劇場前の両開きの扉を開けて、中に入った。

「きゃあああああ」

劇場に入ったとたん悲鳴が聞こえた。私は一瞬ビクツとしたが劇場の上には麻莉亜と由理がいて、もう稽古が始まっているようだった。

劇場には観客席がある。そして舞台下のドアから舞台裏に回る事が出来、そこから舞台の二階にいける。舞台の二階には音響室、裏側を見る大きな窓がある。この大きな窓がいわゆる去年、美代子が自殺した場所である。観客室は縦10、横15の合計150席。

「おいおいおい、ちよつと麻莉亜」

下から国貞が麻莉亜に言った。

「え？」

「そんなセリフ無いはずだけど？」

「はい？ ですが」

「ですがじゃないんだよ。麻莉亜、君はハート役なんだ。もうちよつと頑張ってくれないと」

「……すみませんでした」

すでに稽古がかなり進んでいるようで、厳しい言葉が飛んでいる。由理と麻莉亜の二人が劇場にいて、武丸、カレン、国貞は客席に座っている。由理と麻莉亜がいるという事はスペードとハートのシーンだろうか。

「姫嶋さんとはもつと楽だったよ」

由理が小さな声でぼそりと言った。どうやら麻莉亜は先ほどから失敗ばかりしているようだ。本番の舞台には出た事無かったから、仕

方が無いと思うが。

「そんな事、そんな事言わないでください。私も頑張ってるんです……」

麻莉亜は小さい声で言った。

「おい国貞」

私は観客席の一番前にいる国貞に向かって言った。

「ん……ああ康明か」

どうやら入ってきたのに気づいてなかったようだ。

「案内終わったよ」

「ご苦労。見ての通り、もう稽古始めているよ」

そう言いながら国貞は私に台本を渡してきた。

「これは？」

「前とほとんど変わってないけど、また刷ったんだ台本を」

勇次にも台本を渡した、キミドリ色の背表紙の台本だ。同じ観客席に座っている武丸とカレンも台本を持っている。

「もう戻ってきたんっすか？」

武丸が立ち上がり、話かけてきた。

「ああ、今終わったところだよ」

「おいバイト君」

武丸は勇次の方へ向き直り、言った。

「はい？」

「ここはとも変わった構造をしていただろ？」

「はあ、確かに階段あたりが……」

「あんなじいさんには勿体無さ過ぎる家だと思わないかい？」

「はい？ それと構造と何か関係があるんですか？」

「は？ そうじゃなくて……」

「おい武丸」

そんな事言っている武丸に対して国貞が

「お前はさっきからそんな事ばかり言っているな」

「どついう事っすか？」

「どういう事っすか？って分かるだろ。無料で提供してもらってるんだからそんな事言うのはおかしい」

「ああ、そういう事っすか」

武丸は大げさに頷いた。

「じゃあ団長、逆に聞きますけどどう思っんですか？」

「何？」

「あんなじいさんにこの劇場は合いますか？」

「……去年から思ってたんだけど、お前良くそんな事言えるな」

「は？」

「無神経にそんな事言っなって言っただよ」

「団長だつて俺に対する態度は始めとものすごく変わりましたよ」

「何？」

「俺がトラベルメーカーだつていうのは自覚しているんでね……ちよつと消えるっすね」

そう言つて武丸は扉の方へ歩いていった。

「おい武丸」

私はそう言つた。

「いやマキさん、ただどこかで暇を潰すだけっすから」

武丸は両開き扉を開け、出て行つた。

「……ふう」

国貞は私の傍らで小さくため息をした。

「お前の気持ち分かるよ」

私は国貞にそう言つた。国貞は軽く笑い、私達とは離れた観客席に座つた。

その後しばらく由理と麻莉亜は稽古をして、二人は劇場から下りてきた。

「マキさん」

麻莉亜は私と勇次の方へ向かつてきた。

「何かまた武丸君、悪い事しちやつてるんですか？」

「ははは、そうみたいだね……うん？」

私は麻莉亜の顔をまじまじと見た。さつきは気付かなかったけど、麻莉亜は薄い唇に真っ赤な口紅をつけていた。

「何ですか？」

「麻莉亜……くち」

「え？」

そう言っただけ麻莉亜は両手で口を塞いだ。

「変ですか？　ちよつと恥ずかしいです」

「いやいや変では無いよ、目に留まったただけだから」

「ちよつとイメージチェンジでつけてみたんです、でもうまくいかないなあ」

「舞台の事かい？」

「……はい」

麻莉亜は両手を結び、腰の辺りに当てながらそう言った。

「そんなに焦る事無いんじゃないかな？　麻莉亜は今まで下積みだったから、慣れてないだけなんだよ」

「そういうもんじゃないか」

麻莉亜はそう言った。

「あの……マキさん？」

「ん？　何だい？」

「武丸君の事あまり悪く思わないでください」

「え？」

麻莉亜は何を言っているのだろうか？

「どういう事？」

「彼は彼なりに……その」

「ん？」

「悩みがあるみたいなんです」

「え？」

あの武丸が？　私はそう思った。

「悩み？」

「ちよつと、良く分からないのですが」

と麻莉亜が俯きながら言ったので、私は

「私はそんなに悪く思っては無いよ。どちらかといえば国貞のほうじゃないか？」

と言った。

「団長ですか」

そう言つて麻莉亜は深いため息をついた。

「あの、麻莉亜さん？」

私の横で立っていた勇次が喋りかけた。

「あ、バイト君ですね？ さきほど船の上で自己紹介してくれた」

「はい。佐藤勇次です。あの、ちよつと気になる事があつたので聞いてもいいですか？」

「え？ はい。どうぞーッ」

「おいおいおい麻莉亜、私と話す時とまったく感じが違うぞ」
私は慌てて麻莉亜に話かけた。

「はい？」

「『はい？』じゃないよ」

「だって勇次君は年下ですし、可愛い顔してるし」

「関係無いじゃないか」

私は少しブスつとしていた。

「ヤスさんちよつと良いですか？ 少し話したい事があるんで」

勇次は小声でそう言った。

「はいはい」

私は腕を組んで頷いた。

「麻莉亜さん、あなたにとって武丸さんとはどういう人なんですか？」

「え？」

思つてもみなかつた質問らしく、麻莉亜はとまどつた。

「いきなり……何？」

「そのまんまの意味です。ちよつと気になったんで」

「ふーん。私に興味があるのかな？」

麻莉亜は上目使いに勇次を見た。私が見たこともない麻莉亜の顔だ。
「はい？ あっそういう事にしておきます」

勇次は本当に興味があるのか、それともただ聞きたいだけなのか、私には分からなかった。

「武丸君？ 特にどうという関係じゃないけどな」

「そんな事は無いはずじゃないですね？ さっきも『相談された』とか言っていましたし、船の上でも二人でいましたよね？」

「ふーん、そんな細かいところまで見てるんだ？ 何か勇次君って見た目と感じがちよつと違うな」

「そうですか？ 確かによく言われます」

「聞きたいのはそれだけなのかな？ 武丸君と別に付き合っているとまでは無いよ」

「あ、はいそうなんですか分かりました。あともう一つ、美代子さんの事なんですが……」

勇次がそう言った瞬間、明らかに麻莉亜の顔が歪んだ。

「おい」

私は美代子の質問を続けようとした勇次を呼び止めた。きっとこのままいったら、また変な空気になってしまふと思ったからだ。

「麻莉亜！」

離れた観客室に座っていた国貞が、麻莉亜を呼んだ。

「すいません」

麻莉亜は私と勇次に軽く頭を下げ、国貞の方へ走っていった。

その後勇次が私に小さな声で話しかけてきた。

「ヤスさん、僕なにか変な事聞いちゃいましたか？」

「どっちの事？」

「武丸さんと美代子さんの話、どっちもです」

「あ、うん。私も少し気になっていたんだけど、君は麻莉亜に興味があつたのか？」

「いえ、そういう訳ではないんです」

そう言つて勇次は鼻の頭を掻いた。

「あとで話したい事があります。ここでは話せない内容なので」
「分かった」

その後勇次はトイレに行くと言って、劇場を飛び出した。するとそれを狙ったかのように由理が私の方へ寄ってきた。

「マキさん」

後ろから肩を叩かれながら声がして、私はビックリして振り返った。

「由理か」

「脅かしちゃいました？ ははは」

そう言いながら笑う由理はどこか疲れていた。いわゆる『目が死んでいる』と言うのだろうか。

「由理、何か大変そうだな」

「はい、分かります？ ってさっきも同じような会話しましたね」
由理はそう言つて、私の隣へ腰掛けた。

「さっきは時間が無くて、話せなかったんですが本当にこの一ヶ月が何年間に思えましたよ」

「マスコミの対応だけじゃ無かったのかい？」

「マキさん、僕の家族構成を覚えていますか？」

「え？ ええと……確か」

「母が死んで、父と兄の三人暮らしなんです。兄は僕より三つ上、マキさんと同じ歳ですね」

「そうだったかな？」

「マキさん、ひどいですね。覚えといてくださいよ」

「ゴメン」

私は苦笑いをした。

「それで？ どうしたんだ？」

「それが、兄が交通事故で亡くなってしまったんです」

「え？ 本当に言っているのか？」

「はい……バイクの不慮の事故で」

「それは……何と言つてやればいいのか、残念だったね」

私は言つてあげる言葉が無く、そう言つた。が、由理は

「いえ、兄が亡くなつた事には何にも感じていないんです」と平然と言つた。

「え？」

「兄は仕事も就かず、毎日酒びたり。はつきり言つて死んでくれて良かったぐらいです」

由理がそう言つて、私は思い出した。確かに由理は兄ととても仲が悪かつた。由理は父とは仲が良かったのだが、兄は父と由理と喧嘩ばかりしていた。その主な原因は兄が仕事に就かない事、毎日毎日酒を飲んでいること。父から金を盗んでいたりもしていたらしい。由理の父は仕事を多くしなくてはいけないくなり、体調を崩したらしい。確かに兄を冷たく思うのは当然なのかもしれない。

「兄の葬式などが重なり、寝る時間が無かつたんです。あんな兄だから悪い輩の友達もいっぱいいて、葬式も荒されて延期延期の繰り返し」

「確かにそれは大変だつたみたいだな、でも由理はちゃんとした仕事あつたよね？」

「え？ はい、まあ小さな不動産関係の仕事はありますけど」

「私なんか個人的な仕事は無いからさ、大変なんだよ」

「あ！ そうだつたんですっけ？ お互い大変ですね」

「……はあ」

まさかここまで来て、こんなに現実には直視しなければいけないとはトイレから戻つてきた勇次が私と由理のもとへ戻つてきた。

「カレンさん寝てますよ」

勇次がそう言つたので、後ろを見た。カレンは一番後ろの真ん中らへんの席に座つていた。麻莉亜も由理も話しかけてきたが、カレンは話しかけてこなかつた。寝ていたからか。

その後すぐに劇場に山本が入つてきた。何やら言っているようだが遠くて聞き取れなかつた。国貞と麻莉亜が山本の方へ行つた。すると山本は劇場から出て行き、代わりに国貞と麻莉亜がこちらへ来

た。

「康明、昼飯の時間のようだ。山本さんがわざわざ伝えに来てくれたよ」

「もうそんな時間か？」

私は銀の腕時計を見た。時刻は午後の二時だった。

「そんな時間じゃないですよ。僕はずっと前から腹がペコペコでしたよ」

とこれは勇次。

「早く行きましようよ」

と麻莉亜が言った。

私達は劇場の入り口に向かった。私は出る直前に最後尾席に座っているカレンの肩を軽く叩いた。

「ふわああ、あ？ あ」

カレンは長いまつ毛からぱちりと目を開いた。そして私の姿を認めると

「あ、マキさん？ すいません……あたし寝ていたみたいで」

カレンは、ぼさついた朱色の髪の毛を手ぐしで直しながらそう言った。

「いや、まだ対した事してないから大丈夫だよ。それよりさ、もうご飯の時間なんだ」

「え？ 今何時ですか？」

「十四時だよ」

「午後の二時ですね。うんしょつと」

カレンは立ち上がり、

「行きましよう」

と言った。

私達はガラス廊下を渡っていた。中間地点で例の場所に来た。

「国貞、覚えているか？」

「何が？ ……あ」

外に出る扉の外に円形に広がった、赤い花を見て国貞は分かったよ

うだ。

「これね、僕も気にはなっていた。去年までは確か白い花だったね」
「だよな？ いきなりこんなに変わるなんて、変だよな」

私達は立ち止まらずに、真つ直ぐ進みながら話した。

「国貞、君には言っていないかったが実はあの白い花には不思議な事があつたんだ」

「そうなのか？ 僕は聞いていないが」

「言っていないからね。あの時は話す暇なんかなかったから」

そして私は国貞に、『赤く染まつた花』の事を話した。

「そんな事があつたのか……でも良くそんな事に気がついたな。由理、お前は気付いていたかい？」

「え？ いや僕はあの時は焦っていましたから、全然」

やはり私以外は誰も気付いていなかったみたいだ。そしてふと何気無くカレンを見ると、爪を噛んでいた。

食堂についた私達は縦長のテーブルに乗ってる料理を見て驚いた。
「昼から豪華な料理ですね」

すでにテーブルに腰掛けている山本に向かって由理がそう話しかけた。私は縦長テーブルの上に置かれている料理を見た。カレーにサラダ、コンソメスープが置かれていた。

この食堂の縦長テーブルは椅子が人数分置かれており、この一つのテーブルで全員が食事をする事ができる。テーブルには山本しかおらず、武丸はまだ来ていないようだった。

私達は椅子に座り、適当に話をしていた。私は玄関側の一番端の席で正面には国貞、左には山本老人が座っていた。

私は左に腰掛けていた、山本に向かって話しかけた。

「山本さん？ ちょっといいですか？ 武丸が来るまではみんな食べそうに無いんですよ」

「うん？ ああ、別に構わんよ。なんじゃ？」

「劇場に向かう途中の円形の花輪の事なんです」

「ああ……やっぱり気がついたか」

「そうですね？ 私の間違いではないですよ？ 去年までは白い花が咲いてたと思うんですが」

「そうじゃったな、ジャスミンの希少花だった」

頭の中にあの独特の匂いと、ジャスミン茶の味が思い出された。

「やっぱり……なんで変えたりしたんですか？」

「……全てがひと段落した後に、あの花輪を見たんじゃよ。そして白い花びらが一部ではあるが、小さく赤く染まっていたんじゃよ」

「！（やっぱりそうだったんだ）」

「それで、赤い花もいいじゃろうと思って、変えたんじゃな」

「そうだったんですか」

私は自分の見間違いでは無かったことが分かって、ホッとしていた。

「信じる気にもならんか？ でも確かに赤く……」

「いやいやいや、信じます信じます」

私は上機嫌でそう返事をした。そして

「今度の花はどんなものなんですか？」

「猩猩木ゴウシキという花らしいんじゃ。一般的には『ポインセチア』と言われているらしい」

「猩猩木？」

私は聞いたことの無い花に私はビックリした。

「メキシコ生まれで12月ごろに咲くんじゃって」

「へー。初めて聞きますね」

「真っ赤と言っていたけど、実は真っ赤というわけでは無いんじゃよ？」

「え？」

「良く見れば分かるけど、真ん中には黄色と緑の部分があって、そこが花なんだ」

「詳しいですね」

「二階に図書室があるじゃろ？ そこに花図鑑があっただんじゃ。そこに書いてあったんじゃよ」

「成る程です。じゃあ、後で見に行こうか、康明」

私の正面に座っていた国貞が急にそう言った。私と山本老人の会話を聞いていたようだ。

「猩猩木とはとてもセンスのある花を選びますね、お茶に出来ないのが残念ですが」

「そうなのか？ わしは良く分からんが」

「ジャスミン茶は不思議な味がしていましたけど」

私はそう言った。

食堂内はみんな色々雑談していた。勇次は麻莉亜、カレンと積極的に話しているようだった。勇次いわく、先ほど興味は無いという事だったから、情報を集めているのだろう。

数分すると食堂のドアが開き

「すみません、遅れました」

と言って武丸が食堂に入ってきた。カレンの隣の席が空いている事を見ると、そこへ行き、

「劇場に行っただんですが誰もいなかったの、ここにいるんじゃないかって」

そう言っただけで椅子に座った。

「今まで何をしていたんだ？」

国貞が武丸に言った。

「特にどうという事でもないんですけど、邪魔がられたみたいだったっすから図書室にいました」

「……………」

国貞は無言で頷いた。

「団長、そんな変な空気にしなくても。冷めちゃいますよ、ご飯食べましょう」

由理がそう言ったので私は大きな声で

「いただきますっ」

と言った。全員がいただきますと言いますpoonに手を伸ばした。武丸の方を見ると、手をほったの前に出し『すいません』の合図を

した。

料理は少し冷めていたが、食べれない感じでは決して無かった。カレーもコンソメスープも濃い味がして、サラダもパサパサしていて水気がない感じだった。誰からも『おいしい』という言葉は聞こえず、無言で食べていた。私は濃い味が嫌いでは無いので、そこまでは悪く感じなかった。正面に座った国貞が一口、二口食べて山本老人に、

「これってあれですか？」

と言った。山本は首を傾げ、不思議そうな顔をした。

私は前に出されていた料理をじっくりと味わってみた。するとこの濃い味はどうも『作られた味』すぎるように思えた。国貞の言っている事はもしかして……。私はスープを啜っている山本老人の耳元に、

「これってインスタント食品ですか？」

と質問した。すると山本老人は、恥ずかしそうにコクリと頷いた。正面の国貞は意味ありげに笑っていた。

数分後に全員の皿が空になる頃、山本老人が立ち上がった。

「おいお前ら。ちょっと良いか？」

全員が山本老人の方を向いた。隣の私も同様である。

「天井を見てくれるか？」

山本老人がそう言ったので、天井を見た。食堂の天井は脚立などを使用しなければ届かなそうな距離であり、穴が開いた四角いしきりがついている。

「あそこに見える四角い奴がここの空調なんじゃが、あれがどうも数日前から調子が悪いんじゃない」

山本老人は指をさしながらそう言った。

空調は（私から見てだが）正常に作動しているように見えた。プウーという音も鳴るし、うっすらと風も来ているような気もする。

「山本さん？ 失礼な事を聞きますけど、あれはちゃんと作動してるんじゃない……」

「何を言ってるんじゃない、作動なんかしらんよ」

私の質問は軽くないなされた。

私達は山本老人に手で急がられるがままに出口に誘導され、台本もテーブルに置いて食堂を出た。食堂のドアが閉まる直前に武丸が、「そのぐらいやつとけばいいのに」

と言った。

「武丸」

国貞が横目で見たので、武丸はムツとして口を閉じた。こんな光景を私は今日だけでも何回見たらだろうか。

その後談話室に場所を移し、国貞から全員に寢室を発表された。しかし部屋割りとは去年にきたときと全く同じだった。勇次は去年いなかったたので空いていた、二階の麻莉亜の部屋の隣になった（部屋割りは、fig1参照）

「食堂の端にあつた脚立は気にはなっていたけど、こういうときのために置いてあるんですね」

由理が誰に言うでも無くそう呟いた。私は脚立の存在にも気がついていなかったが、由理の意見を聞いてそう思われた。

その後、談話室にいる意味が無いと武丸が言ったのをキツカケにして、一人また一人と自室へ戻っていった。最後まで残ったのは私と国貞、勇次だが少し雑談した後で国貞も自室へ戻っていった。

「やつと二人になれましたね？」

「え？」

唐突に言われて私は少しドキッとしてしまった。

「いや、変な方に思わないでくださいよ？ さっきの劇場の続きです」

「ははは、そんな事は思わないよ！ そういえば、『ここでは話せない内容』とか言ってたけど？」

「そうですそうです」

そう言って勇次はソファによっかかり直した。

「Kでの会話を覚えていますか？」

勇次は本題を話し始めた……

「Kのこと？」

「あれです……『しがないハート』というブログの」

「ああ、そんな事もあったね」

「僕、美代子さんの自殺した日に一緒にいた訳では無いんですが、少し疑問に思っんです」

「え？」

「あれは本当に自殺だったのかって」

勇次は急に真面目な顔になり、喋りだす。

「そういう事か……確かに私も気にはなっていた」

「本当に自殺だったのだったのであれば、『しがないハート』は本当の記述をしていたのだと思います。確かに執拗ないじめがあったのであれば自殺だったことに」

「ちよつと待って」

私は勇次を止めた。

「私は君の言っている事が良く理解できない、包み隠さず言ってくれ」

「はい。はっきり言います。僕は美代子さんは他殺されたと思っています。そして犯人はカレンさんと麻莉亜さん」

「何だって？」

「前に国貞さんから、去年の事件の事を聞いた事があったんです」

「うん」

「その時から思っていました。美代子さんの転落した時に現場にいなかったのは、カレンさんと麻莉亜さんだけ」

「君の言っている事は分かる、でもね……」

「ちよつと待ってください、最後まで聞いてください」

勇次は私がしゃべろうとしたのを止めた。

「ヤスさんが言いたい事は分かります、美代子さんはちゃんと自分で台詞を言っているようだった。そんな都合よく殺害なんて出来な

い」

「そう。そしてもう一つ。美代子は転落した際、頭から落ちたんだ」
「……？」

「分かるかい？ 自殺する人というのは、普通は頭から落ちるものなんだ。少しでも辛い思いを、したく無いという真理が働くからね。だからもし落とされたとしたら、もっとおかしい動きをするはずなんだ」

私は本で読んだ事のある事を、勇次に話した。

「でも、100パーセントではありませんよね？」

「それはそうだけど……」

二人でいる談話室に無言の空気が流れ、気まづくなっていた。

「そろそろ戻りますか」

珍しく勇次がそう提案したので

「うん」

私は空返事をし、私達は自室へ戻っていった。

各寝室は六畳ほどの部屋で床は、全面が畳。シングルベットが一つに小さい冷蔵庫、家庭ラジオがあるだけでテレビは無い。寝室のドアは鍵（鍵は先ほど談話室で国貞から全員に配られた）が掛けられるようになっていて、これは内側からも開錠出来る。そして内側からロックを掛ける事も出来る（ドアの構造については、fig2 参照）

私は部屋で適当にラジオを聞きながら、ベッドの上に横になっていた。午後四時を告げる、ポーンという音が鳴りパーソナリティーが変わった時、ドアがノックされた。

「はい？」

「康明？ 起きてるか？」

「うん？ ああ、国貞か。起きてるよ」

私は体を上半身だけ起こし、ベッドのしきりに腰をまかせた。

「開いてるからどうぞ」

「違うんだ、ちょっとおかしい事が起きたんだ。ホールにみんな

るから来てくれ」

「？ 分かった。ちょっと待ってて」

私は寝間着にも着替えずベットの土へ横になっていたたので、そのまま部屋から出た。

一階ホールに出ると確かに全員いた。

「マキさん」

由理が私の姿を見た途端、寄ってきた。

「団長から聞きました？」

「いや、まだなんだけど」

私は全員の顔を見た。みんなちよつと不機嫌そうな顔をしている。

「国貞？ 何があつたんだ？」

後ろでにドアを閉めた国貞に向かつて、私は言った。

「先ほど食堂での事を覚えているか？」

「食堂？ 空調の事か？」

「ああ、そうだ。僕達は山本さんに言われるがまま、食堂を追い出された……台本も置いて」

「うん、そうだったけど……え？ もしかして？」

国貞は隣の食堂を開けて、私を入れた。先ほどテーブルの上に置いた全員の台本が無くなつていた。他のものは何一つ変わつてゐる所は無く、台本だけが忽然と無くなつていた。

「これは……？」

「どういつつもりつすかね？ こんなイタズラをした人は？」

武丸が食堂の中へ入つてきて、私にそう言つた。

「全員の部屋を調べれば、こんな事した人はすぐに分かるつすよね」

国貞は開け放られた食堂のドアから、ホールにゐるカレンと麻莉亜に言つてゐるようだった。

「彼女達が寢室を見られるのは、プライバシーとかで嫌だつて言うんですよ」

「当たり前じゃない」

とカレンが言う。麻莉亜は少し俯いてゐる。唇はまた口紅を塗りな

おしたのだろうか、唇は先ほどよりも綺麗な赤色に染まっている。
「ちよつと待つて」

私は武丸にストップをかけた。

「国貞、山本さんは？」

「ちよつと待つて」

数分すると山本老人が食堂に入ってきた。

「わしはなんも知らんぞ」

「空調の調整が終わったのは、どのくらいですか？」

「ん？ お前らがここから出て行ってから、十分ほどじゃったかの？」

「その時からずっとこのまんまだったんですか？」

「ああ、もちろん台本なんかには触っていないぞ」

「じゃあ、やっぱり誰かが台本を故意に隠したいう事に……」
私はそのように言った。

「でもちよつと待つて。こんなイタズラをしてもあんまり意味が無いと思うんですけど」

カレンが言った。

「それはどうかな？」

と国貞？

「どういう事ですか？」

「台本を無くさせて、練習をサボろうって考えているのかも知れない」

「え？」

「いいかい？ さっきの稽古で劇場に一番いなかった奴がいたんだろう？ そいつが故意に隠して……」

「ちよつと待つてくださいいよ団長」

武丸が声を上げた。

「そいつって俺の事つすよね？ 俺は部屋を調べたほうが良いっていつてるんつすよ？」

「何も自分の部屋に隠す馬鹿はいないだろ？」

国貞は武丸が犯人だと思っているようだった。

「そんなの言いがかりだ」

「どうだか？」

「ちよつと待てつて」

私は二人の間に入った。

「今そんな事言っけていても仕方が無いじゃないか」

「マキさん、正直俺はどうだっけていいんすよ。ただすぐに突っかか
つてくる団長が嫌なだけで」

「……………」

「と、とにかく今日はもう終わりでいいじゃないか」

私はこの場を押さえるには、それしか無いと思った。

「あの……僕は？」

ホールに突っ立っていた勇次がボソリと言った。

「僕、まだ何にもしていませんよ？」

「いいから」

私は話を逸らした。

その後、不服そうな顔をしながら各自自室へ戻っていった。午後
七時、食堂に集合し夕食を食べた。さきほどまで皿も片付けられて
無かった食堂はすっかり綺麗になっていたが、テーブルに置かれた
料理は先ほどと同じインスタント食品だった。もう全員気がついて
いるのか？ それとも先ほどの台本消失事件のせいかな、食堂には思
い空気が流れ『カチャ、カチャ』といった音しか聞こえてこない。

途中でカレンが「トイレに行く」と言っけて食堂へ出たが、それ以外
は誰も食堂を出なかった。

しばらくすると麻莉亜が

「すみません」

と言っけて、半分以上も夕食を残して食堂を出ようとした。

「どこに行くんだ？」

国貞が麻莉亜に質問した。

「ちよつと気分が良くなくて」

麻莉亜はそれだけ言って、食堂から出て行った。

シチューと、ハンバーグ、サラダを食べて私は心の中で、ごちそうさまと言った。武丸、カレン、勇次はすでに食べ終わり食堂から出て行っていた。

「山本さん、ごちそうさま」

国貞は山本老人に控えめに言った。

「すみませんね、何か変な感じになってしまつて……」

「気には、する事無い」

「でも今日は大した稽古もしてませんし」

「いやいやいや、こんな老いばれの所に来てくれるだけでも、嬉しいんじや。さつ早く部屋にいきな」

山本老人は恥ずかしそうに顔を背けながら国貞に言った。

私は山本老人に話しかける事が出来ずに、国貞と食堂を出た。

「康明、少し時間あるかな？」

「え？ 特にやる事無いから暇だけど」

私達はその後、図書室で十時まで一緒にいた。

恒例の劇団の話……では無く、台本消失、国貞の最近の実験について話していた。

台本消失には決定的な証拠も無く、まずそんな事をする理由も分からなく話は進まなかった。逆に進んだのは実験のほうだ。国貞は現在も高校の薬剤部のOBで、ちよくちよく研究室へ行っているらしい。しかし最近個人的に行っているのは『薬』では無く、特殊素材の研究らしい。

「君にもいつか見せるよ」

そう国貞は言っていた。

十時に図書室を出、部屋が同じ方向なので一緒に行った。各自風呂には自由に入るとの事だったので、私はその後二階でシャワーを浴びた。

結局ベットに横になったのは十一時前だった。最近は何事も無かった為、横になった途端すぐに寝てしまった。

* * *

牧野康明が知らない所で、ある人物のシナリオは一ページ、一ページ確実に進んでいた。

その人物は、自分の描いたシナリオに絶対の自信を持っていた。さきほどの台本消失もシナリオの内であり、もちろんシナリオ通りに事が運んだ。

『完璧な犯罪』など存在しない……それは常日頃から思っている。だから自分一人だけが疑われる事の無いような状況を作り出し、何事も無かったかのように石川県に帰り、今までと同じ生活を送る。そんな状況が一番望ましい。

コツコツと小さな足音を立てながら、細く暗い廊下をゆっくりと歩きながら頭の中でそう考えていた。

目的地に一步一步近づきながら思う。下準備は成功している……あとは実行する勇氣と、多少の運だけ……のはず。危ない綱を渡る必要は無いんだ。

その人物は目的地へたどり着いた。二階の浴室側の部屋の一室である、水野麻莉亜の部屋に。

「午前一時になりました。ご存知『ゴースト』のラジオです」

水野麻莉亜はベットに横になりながら、部屋に置いてあったラジオでお気に入りのラジオ番組を聞いていた。寝室が同じブロックである、バイトの勇次君にはうるさくて、迷惑かな？ とは思ったけれど、一つ部屋が空いているから聞こえないだろうと思っていた。

今まで下積みを重ねていて、やっと舞台に立てるようになったのに、今日は思った通りの演技をする事が出来なかった。

舞台に立てるようになったのはとても嬉しい、それにあのハート役だ。なのに何をやっているのだろう。

ハート役に抜擢されたのは、いわば美代子のおかげである。それだけに私は罪悪感がいっぱいだった。去年の美代子の転落事件、けつしてあれは美代子が望んだ事では無かったはずだ。私もすくなか

らず関係しているんだ。そう思うとため息が出てきた。

カレンさんはどう思っているのだろうか？ 一番関連深いのはカレンさんの筈だ。船ではハート役になれなかった事で不機嫌だったけれど。

それに今日はおかしな事が二つも起こった。一つは台本消失、こんな事で稽古が出来なくなったりしたらたまらない……実際、午後の舞台稽古は行われなかったのだ。誰がこんなイタズラをしたんだろうか？

そしてもう一つ、それは……。

コンコン

急にドアがノックされて、麻莉亜はビクツとしてドアを見た。こんな夜中に誰だろう？ 麻莉亜はドアの方に向かい、向こう側にいる人物に話しかけた。少しその人物と話ただけで、中へと招き入れた。最初から鍵などはかけていなかった。

麻莉亜の部屋に入ったその人物は後ろ手に鍵を掛けた。

「何をしてるの？」

麻莉亜がそう質問すると、その人物は思っても見なかった事を言った。

「え？ 何であなたがその事……」

麻莉亜が最後まで喋るのも待たずに、その人物は飛びかかった。

「きゃあ」

飛びかかられた反動で麻莉亜はベットの方へ横転し、ベットの上へ置いてあったラジオは落ちてチューニングがずれ、ザザーとしか言わなくなった。

その人物は麻莉亜の上へ馬乗りになり、そのか細い首に手をかけ、締め付けた。

「がああ」

女性のものとは思えないような声が、口から漏れた。必死で絞めている手を剥がそうと抵抗するが、こっちの方が圧倒的に不利な体位な為、ビクともしない。

息が出来ない。普段体験しないそんな事が、こんなにも辛いとは思わなかった。

なんで私が殺されなきゃいけないんだろう？ やっぱり去年の事件のこと？

自分の首を絞めている人物の、ギリギリという歯の擦れる音が聞こえる。この人も必死なんだ……朦朧とする意識の中で麻莉亜は抵抗するのを止めた。その人物の手から自分の手を外した。

目の前の人物の顔が大きく歪んだように見え、意識が無くなった。水野麻莉亜はそこで絶命した。

気がつくとかザザーというラジオの音が聞こえ、我にかえた。首を絞めているのに必死で頭の中に酸素が渡らず、すこし気絶していたようだ。

「はあ、はあ」

初めて行った殺人という行為。二時間ドラマやニュースなどで良く聞く言葉で身近だが、こんなに大変なものだとは思わなかった。

とりあえず、ラジオの電源を落とそうと手を伸ばすと、体全体が汗まみれなのに気がついた。

まずい……汗で犯人を特定できる事を知っている。

汗が部屋に落ちたなら、ここは畳だ……染み込んでしまっている。危険要素はすべて排除したい。どうしたものか……そうだ。

その人物は当初のシナリオに新たな事柄を追加した。そしてそれらを実行に移した。

* * *

第三幕 劇場「黒船」(後書き)

ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1717c/>

黒影十字軍 - 殺人幕 -

2010年10月8日14時55分発行